AACK 京都大学学士山岳会 No.65・66

# Newsletter

July 2013

http://www.aack.or.jp

目次

ヤルン・カン初登頂四〇周年記念特集
ヤルン・カン　斎藤惇生……1
ヤルン・カン後、わたしの四〇年　上田　豊……8
ヤルン・カン（遠い記憶）　甲斐邦男……11
遠征と遭難の日々を振り返る　―ヤルン・カン遠征四〇周年―　松沢哲郎……17
ヤルン・カンスケッチ　一九七三　吉野熙道……24
オッポンダーンの道（ヤルン・カン目指して）　新井　浩……28
ヤルン・カン遠望　斎藤清明……31
ヤルン・カン登頂四〇周年記念展……32
アコンカグア登頂　安仁屋政武……32
第二四回雲南懇話会（二〇一三年三月三〇日開催）の講演概要とコメント　安仁屋政武、前田栄三……38
AACKニュース……40
会員動向……40
編集後記……40

# ヤルン・カン初登頂四〇周年記念特集

## ヤルン・カン

斎藤惇生

### はじめに

昨年の二〇一二年は、サルトロ・カンリ五〇周年だった。今年はヤルン・カン四〇周年になるので、参加した隊員として執筆するようにと前田編集長から依頼があった。五〇周年には多分この世を失礼していることだろう。ヤルン・カンについて私なりに回顧して、少し詳しく書き残すことにした。ニューズレター六三号にすでに吉野がヤルン・カンのことを書いている。重複するところや考えの違うところがあると思う。容赦されたい。ヤルン・カン隊員一五名中現在生存者は吉野、神山、上田、甲斐、松沢、斎藤の六名になってしまった。各自が執筆するのだが、貴重な特集号になるだろう。

### 報告書ヤルン・カンと時報八号

執筆依頼があってからヤルン・カンの朝日新聞社刊の報告書と、AACK時報八号を改めて読みなおしてみた。もう忘れていたことが思い出されて、あまりに多いのに驚いた。

チョゴリザ、ノシャグ、サルトロ・カンリと七〇〇〇m級の未踏峰の成功が続いたが、ヤルン・カンはAACKにとって初めての八〇〇〇m級の未踏峰の挑戦であった。これは今西錦司たちAACKの創設者たちが、戦前英国がエベレストなら世界第二位のK2をと真剣に計画して以来のまさに悲願であった。遠征隊帰国後、時報八号掲載の一九七三年九月一五日と一六日の二日間に行われた、ヤルン・カン遠征・報告検討会、そして報告書掲載の座談会「ヤルン・カン登頂の意義と背景」を読むと、先輩たちの発言にヒマラヤ八〇〇〇m級の未踏峰に対する熱い思いをくみとることができる。また松田、上田が登頂成功して帰路松田を失ったことに対する検討、的確な指摘も詳しい。私も隊員として報告会に出席発言もしているのだが、会の雰囲気や進行の情況など四〇年も経つと記憶が薄らいでおり、愕然としながら何度も読み返した。

この報告検討会と座談会の記録は、AACKだけでなく日本の登山

カンチェンジュンガ山塊全景

史においても貴重な内容である。私の持っている時報は、紙も変色し活字も薄れてきている。この部分を別刷再版して会員に届ける価値があると思うので提案したい。

**ヤルン・カン登山許可まで**

ヤルン・カンはカンチェンジュンガ西峰として知られていた。カンチェンジュンガはシッキム住民が聖山と崇めており、この山への入山はシッキム住民の同意が必要とされてきた。ＡＡＣＫのヤルン・カン計画が始まったのは、一九七四年であった。会員中尾佐助が大阪府立大の隊長として、一九七二年カンチェンジュンガの北西にあるヌプチェ登頂、一九七三年にはシャルプの登頂をした後広く調査をし、そのなかの二名の隊員がヤルン氷河に入り、カンチェンジュンガ西峰に対峙するタルンピークへ試登し、西峰の写真を撮り西峰が現地ではヤルン・カンと呼ばれていることも聞いてきた。中尾はこの情報をＡＡＣＫにもたらし、西峰は明らかにネパール領にあり、ヤルン・カンで申請すればシッキムを刺激しないのではないかと提案した。計画はすぐ検討され一九六四年総会で決定、ネパール政府に申請。八月には一九六五年のプレモンスーンの登山許可がくるという早さであった。

舟橋明賢を隊長に隊が編成され準備が開始された。しかし突然ネパール政府は国内全山の登山を禁止した。舟橋がカトマンズに飛び、丁度ＫＵＡＣのガネッシュ隊登頂成功後カトマンズにいた樋口明生と共に、ネパール政府、インド政府と直接交渉したが全く進展しなかった。登山料の半額はデポされ解禁されればＡＡＣＫの優先権は確保された。

一九六七年樋口と松田隆夫の二人が交渉と偵察に派遣された。二人はヤルン氷河に入りヤルン・カンの偵察試登を行い、キャラバンルートの検討をしてカトマンズに帰った。約一ヶ月間政府と粘り強く交渉したが、やはり進展はしなかった。

その後、今西寿雄、西堀栄三郎、田附重夫、木村雅昭が機会あるごとにネパール政府に直接交渉を続けた。しかし明るい知らせは無かった。

一九六九年カンチェンジュンガ地域以外の三八山の登山が解禁された。

一九七一年八月に一九七二年よりヤルン・カン、ジャヌー、カンバチェンの三峰の登山許可の公電が入った。こうして苦節一〇年でヤルン・カンの許可を得たのだった。

**遠征隊の編成、準備**

理事会は樋口を隊長に選任し実行委員会が組織された。今西寿雄が長の隊員選考委員会は、公募に応じた二五人から一三人を選んだ。一〇月中旬には井上治郎をネパールに特派し、登山料を支払い正式許可書を取得、またガネッシュで活躍したシェルパのカルマをサーダーに雇用した。カルマはＪＡＣ信濃支部のアンナプルナ隊に行く予定になっていたが、本人の意思も確認し信濃支部に頼み譲ってもらった。他のシェルパについてはカルマに一任した。登攀計画は上田が立案し、それを基に装備、食糧、酸素、シェルパ数が計画された。

募金が開始されたが期間も短く社会情勢もあって目途が立たなかった。今西錦司から社会的に有名で実業界に人脈を持った西堀栄三郎を総隊長にと提案があり、本人の了承を得て一〇月一五日の理事会で決定した。総隊長の秘書兼世話役に田附重夫が選ばれた。彼は英国留学時代ネパール皇太子と学友だったので渉外も担当した。最終的に隊員は一五人で樋口は登攀隊長になった。募金は西堀の知名度と活動により順調となり、朝日新聞の後援も決定した。

## キャラバン

ネパール東南部にある町ダーランに全ての荷が集積された。大量の食糧アタ（小麦粉）、米などが購入された。一人が担ぐ約三〇kgの荷が四〇〇になった。荷の総重量は約一三トンであった。隊員一五人、シェルパ一七人、ポータで四五〇人の大キャラバンが二月二〇日動き出した。サルトロ・カンリでは出発時二五〇人のポーターだった。ポーターはネワール、ライ、リンブー、タマン、カンパ族で顔立ち服装も少しづつ違っている。女もいれば一〇代半ばぐらいのあどけない顔の少年少女もいた。

出発するとすぐ一三〇〇mのシャングリラ峠の登りになる。休むに適当な所に茶店がある。チャイハーナという。砂糖、ミルク入りの紅茶を飲んでくつろぐ。カラコラムのキャラバンより旅を楽しめる。

西堀総隊長は鈴のついた馬に乗り、馬子の少年と連絡将校のダマンが付き添う。この馬は森本陸世がゴーラ（馬）というネパール語を一つ覚え、近くの村に行って連れてきた。少年はライ族でティリツェという名前で、よく気がついて世話をやくので総隊長はツェラム滞在中も残して使っていた。

大キャラバンは隊員とシェルパのまとめで順調に進んだ。早く咲く真赤なラリグラス（石楠花）が所々咲いていて目が和んだ。日本のポンカンによく似たスンタラを買って食べた。甘酸っぱく美味でのどがうるおった。

カラコラムの時と同じように、テントを張ると病人が押し寄せてくる。高木真一はまだ医学部の学生だったがよい機会なので実地診療をさせた。だいたい頭痛、腹痛下痢、咳、関節痛である。訴えに合った薬を出せばよい。一人背中に化膿したおできの患者が来た。切開して膿を出したらよい。あいにく外科器具の箱がすぐ見あたらないので、ポケットにあった肥後の守のナイフを出して高木に切開させた。麻酔無しだったが患者はピクとも動かず、痛いとも言わなかった。

三月一日タプレジョン（一七七六m）に着いた。飛行場の建設が始まっていた。夕方荷物を置くとポーターたちがみな帰ると騒ぎだした。一〇日も歩き高度が上がって寒くなってきた。亜熱帯に住んで薄着の彼等には堪えがたかったのだろう。ダマン大尉やカルマが喧嘩ごしに説得するが治らない。横で見ていると腰にさげたククリ刀を抜いて暴れだすのでないかと心配になるほどだった。彼等の部族から世界最強のグルカ兵がでている。結局全員に賃金を支払った。会計担当の上田は電卓を手に大忙しであった。

翌日朝ポーターが集まりだしたが到底足りない。隊を分けてヤンポディンに向うことになった。

三月五日最奥の村ヤンポディン（一六七〇m）に着いた。畑に馬鈴薯が植えてあった。南米原産の馬鈴薯がヨーロッパに入ってからどのくらいの早さで、ネパールで栽培されるようになったのだろうか。

タプレジョンに残った荷は七日にはヤンポディンに到着した。氷雨が降り村の近くまで雪が降った。ヘレのチベット系カンパ族のポーター以外進むのを拒否した。ヤンポディンの村人は三倍の賃金を要求した。のまないと仕方ない。ツェラムまでドウピラ・ラ（二五三〇m）とラミテ（三三五〇m）、二つの雪の峠を越さねばならぬ。高所と雪になるとチベット族がたよりだ。松田とダマン大尉は、カトマンズであらかじめ取得しておいた特別許可を持って、北方のワルンチュンゴーラ方面へ行き、カンパ族のポーター三八人を連れてきた。外国人入域禁止区域だった。八月に出た先遣隊がツェラムに到着しルートが確保された。ツェラムは雪に被われていた。

一一日馬上の総隊長に、田附、ダマンと私

ヤルン・カン隊唯一の全員写真（タプレジョン）

がついてヤンポディンを出発した。道は狭く険しくなり上り下りがあり、下りは馬から下りて歩かねばならぬ、落馬しやすい。ラミテからヤルン氷河の下流のシンバコーラへの下りは、雪に被われた倒木に馬がはまりこんで動けなくなったりして難儀した。しかし一三日に総隊長は無事元気にツェラムに到着した。一六日にはヤルン氷河からBCへの偵察が開始された。ヤンポディンの隊荷は一五〇人のポーターを使って一〇日かかって、すべてが失われることなくツェラムに集積された。井上と甲斐は最後までヤンポディンにいて送り出しを、上田と森本はラミテの峠下に中継点を作りポーターと隊荷のチェックを続けた。

**ヤルン・カンの名前の定着、高度八五〇五mの高度測量認定**

AACKがカンチェンジュンガ西峰を、ヤルン・カンでネパール政府へ登山申請してから、公的、一般に広く使用されるようになった。その後出版された地図はYALUNG・KANGと印刷されている。

BCに入った上田は南極越冬中に熟練した測量技術を基に、氷河上に一〇〇〇mのベースラインをとり、カンチェンジュンガ主峰の高度八六〇〇m（地図では八五九六m）を基準として測量し、ヤルン・カン八五〇五m、カンチ南峰を八四九一mと測定した。これでヤルン・カンは世界第五位、八〇〇〇m峰で最後の最高の未踏峰であることが決定した。これはアルパイン・ジャーナルに投稿報告された。その後測量して高度が変った報告は無い。

**登攀**

総隊長を除いて隊員一四人中ヒマラヤ遠征経験者は七人であった。シェルパはカルマ以下一二人、下部キャンプの荷上げに使用予定のシェルパ族のローカルポーター一五人（実際にはCVまでの荷上したもの、雪稜まで行ったプル・テンバがいる）、コック二人であった。

ヤルン氷河にはラムゼーグレイシャキャンプ、コーナーキャンプが作られ中継地とした。ポーターたちの賃上要求、食糧の売渡し価格交渉、ケロシンの使い過ぎでの燃料不足など問題はいろいろ起こったが、三月二七日設営したBCに隊荷は順次到着した。

三月二八日CIまでのルート偵察を皮切りに登攀が始まった。BC～CI、CI～CIIはクレバスや氷雪壁の突破に、梯子、丸太、ワイヤー梯子が使われ、CI～CII間はフィックスのべた張りになった。

四月九日CIIへの荷上げが始まった日の夕、CIの高木から連絡があり、シェルパのミンマ・ノルがひどい咳、痰、呼吸困難を来しているとのことだ。高山病か肺炎と判断し酸素吸入をすることと投与する薬を指示した。症状が好転しないので医者の卵の高木は焦っている。午後六時私はCIに行くことにした。幸いCIに二回往復している。薬品や注射を用意して二人のシェルパに同行してもらった。一一時ごろCIについた。ミンマ・ノルは意識あるが呼吸困難と咳で寝ることもできない。起座呼吸である。治療で好転してきた。一一日隊員シェルパ総出でミンマ・ノルをシュラーフに入れ梯子にくくりつけて担ぎ下ろした。七〇〇m下しただけでもう酸素も要らないぐらい恢復したのに驚いた。高度障碍は高度の低い所へ早く移すことが治療の大原則だがその通りであった。

CII～CIIIはやや容易になった。しかしCIIIは七〇〇〇mで高度の影響を感じ始めている。CIIIでは泊第一夜だけ酸素〇・五リットル吸っている。四月二六日CIV（七四九〇m）、二九日には上田、甲斐がCV（七九八〇m）予定地に到達した。しかし予定の設営はできなかった。

一応前期終了として隊員は順次交替してBCに下りて休養した。この時点では酸素、装備、食糧などCIIIからCIVに予定数が上っていなかった。ツェラムの総隊長がハムでキャッチした天気予報によると、今年のモンスーンは開始が早くなり五月二〇日ごろになるとのことだった。これらと隊員の意見を綜合して、樋口隊長は予定のCVIを作ってアタックを、CVよりラッシュでアタックに変

頂上の松田

更した。そして第一次アタック隊員に松田と上田を指名した。サポート隊員は吉野、浅野、カルマだった。

アタックに向けて後期行動が開始された。五月八日には隊員とシェルパがCⅢ、CⅣに入った。九日、一〇日、一一日とCⅣよりCⅤへの荷上げが悪天、深い雪に阻まれて到達しなかった。

五月一二日、甲斐、森本はCⅣを出てCⅤ予定地を通過し主稜線（八一〇〇m）に達し、偵察したが、すぐの灰色三角と呼んだ岩稜と前衛峰の登りが極めて困難ということが分り、これまでどおりトラバース、雪稜ルートに決定した。この日高木はカルマと三人のシェルパとCⅤへの荷上げをした。シェルパは疲れて途中から引返すと言いだした。激しい言葉のやりとりと報告にあるが、高木の一歩もひかぬ強い態度にシェルパも根負けして従った。高木はCⅣに戻る時、数歩歩いては立止るほど疲れはてていた。

翌一三日快晴、アタック隊員の松田、上田、サポートの吉野、浅野、カルマがCⅤに入った。記録には斎藤、田附がCⅢからCⅣに荷上げとなっている。何を荷上げしたのか酸素を吸って登ったのか記憶にない。空は晴れてジャヌーが目の前だった。田附が息をつめて映写機をかまえ、撮り終るとおおきな息を何回もして顔をゆがめていたのは憶えている。

一四日のアタック、登頂成功、松田と別れた後の彷徨状態など上田が詳しく述べるだろう。

**検討会でのサポート態勢に対する批判**

悪天もあったがCⅣ、CⅤへの荷上げが計画どおり進まず、ラッシュでのアタックになった。アタックの朝にアタック隊が先に出発、サポート隊が準備に時間がかかり約五〇分遅れて出発した。途中で浅野の酸素がきれ浅野の荷を吉野とカルマが分けて背負い浅野はCⅤに引返した。八一四〇mのデポ地で待っていた松田と上田に酸素ボンベなど渡したのは午後一時ごろになった。どんな理由があったにしろサポート隊は先行すべきであった。また標識になる赤旗がCⅤの荷のなかに無く、ルートはハーケンの残置だけになった。これらに対してきびしい批判の発言があった。

一五日朝松田と上田を発見。CⅣの甲斐、森本、ニマ・ノルブをCⅤを通過して救援に出発させた。彼等は夜七時三〇分上田と出会い救出し、CⅤへ午前四時帰着した。一六日には富田、高木はデポ地まで登り、松田を捜索している。CⅣには全身浮腫の高所障碍から完全復帰した松沢が待機していた。人的には一四日にはCⅤにサポート隊の配置は可能であった。

樋口はCⅤのテント収容、酸素食糧の配置、第二次アタックもありうることを考え、隊員の体力の温存を計った。そして一次隊はたとえビバークしても、デポ地に酸素ボンベ、飲料があるので切りぬけて帰着すると信じたと言って、甘い考えだったと反省している。このことは私も含めて隊全体がそのように信じていた。八〇〇〇mを越えてさらに五〇〇mの登攀のきびしさの体験不足であったといえる。ビバーク時ツェルトは飛ばされ、酸素も無くなり、標識もない稜線をもうろうとした頭でもと来たルートを間違うのは当然で、またトランシーバーが故障して通じなくなったのも痛手であった。

**酸素についての考察**

酸素は隊員は七五〇〇mより睡眠〇・五リットル、行動二リットル、シェルパは八〇〇〇mから使用を基準として行動計画に基づいて計算、川崎重工業製を登攀用九一本、医療用一〇本、非常用一〇本で計一一一本、CⅥ以上はフランス製二四本用意された。井上がカトマンズで安い売物を見付け一〇本購入、フランス製は三四本になった。

川崎製は四リットルで六・一kg、一五〇気圧、フランス製は四リットルで五・七kg、二三〇気圧で明らかにフランス製が有利である。毎分二リットル吸えば川崎製は五時間、フランス製は七時間四〇分になる。始めのころの募金の集まり具合を見て、川崎製が多くなったと思うが、発注して製品が届いたのは年内船積みの直前だった。

一九七〇年の日本山岳会のエベレストの報告を見ると、フランス製一五〇本、川崎製二〇〇本である。

酸素係であった浅野、一九七〇年のエベレスト隊に参加して酸素使用の重要性を経験した神山が、隊員に酸素器具の取り扱いなどを伝えられなかったと反省している。酸素を大量に使用する登山はAACKでは初めてであり、隊全体の酸素に対する研究、関心が不十

分だったことはいなめない。

しかし一番の問題は初期準備段階で予算の関係で川崎製を主に発注しなければならなかったことだと思う。同じ本数荷上げしても労力は同じで効果の差は大きい。幸いカトマンズで一〇本購入できたが、もう二〇本ほど川崎製がフランス製に変更されていたら、CⅣ以上の計画はスムーズに進んだのでないか。シェルパが思ったより弱く荷上げが遅れたという見方があるが、シェルパにも強弱があり、みながヒマラヤの鉄人ではない。最終的にCⅣからの荷上げに酸素も使用したが、もう少し早い時期に八〇〇〇m以上で使用にこだわらず使用できたのではないだろうか。

**上田の凍傷と心電図の考察**

五月一五日上田は松田と分れデポ地を探すうちに、意識がもうろうとなり彷徨状態になった。甲斐、森本、ニマ・ノルブに夕刻救出され、CVに翌朝四時帰着した。左足のアイゼンはなく高所靴だけ、右のオーバ手袋も失っていた。しかし困難な下降ルートをスリップもせず、歩いた。そうでなかったら救援隊三人の酸素は切れており、救出は困難をきわめていただろう。

上田はCVで休息して二六日のうちにCⅣに到着した。意識は問題なく応答もしっかりしていた。頂上で脈拍を測るようにと指示したのだが一分一三二だったと言う。五秒づつ二回測ったらしい。上田の真面目さに感心し脳に障碍がないと確信した。また彼は高度順応の指標となる息こらえ時間測定を一番真面目に実行した。これは苦しい検査であった。右手は拇指以外全指、左はⅢ、Ⅳ指、足は両側とも全趾蒼黒色で凍傷Ⅱ～Ⅲ度である。無駄と思ったが一応四〇度ぐらいのお湯に、両足と右手を一時間つけて温湯融解療法をした。感染しないようにして、日本に帰さねばならぬ。上田はBCまで難所も全く自力で下降した。BCからツェラムまでゆっくりだが歩きとおした。歩行のため患部が悪化することは無かった。二九日ヘリコプターが来て、樋口、田附と一緒にカトマンズに飛んだ。六月二日日本帰着。京都市立病院へすぐ入院。凍傷趾指の切断、右指の植皮などうけ一二月一八日に治療終了。治療手術の詳細は時報八号に報告してある。

ヤルン・カンでの心電図検査は、小型化され乾電池駆動の心電計で行なった。サルトロ・カンリでは、三〇kgの発電機に酸素吸入しながらやっと撮れた。雲泥の差である。一九七〇年のJACのエベレスト登山隊に参加した中島が、心電図を撮って報告している。サルトロの時に右心負荷と考えられるパターンがあったが、エベレストでも同じ傾向であった。即ち低酸素刺激により肺の血管の収縮が起り、肺にガス交換のため静脈血を右の心室から肺に送りこむ血管である肺動脈圧が高くなり右心室負荷となる。心電図ではⅡ誘導のP波鋭高、胸部誘導のT波が$V_1$か$V_6$へと順に逆転する。しかしこのパターンが出現した者が高度障碍が強いとはいえない。

登頂隊員を選ぶ時、樋口隊長から隊員の健康状態を聞かれた。心電図の所見が決定的でないことを前提にして、所見からA異常なし、B若干異常、C異常ありと分けた。上田はA、松田はBだった。T波は$V_1$で逆転、$P_2$波の鋭高があった。その他に自他覚的に高度影響の症状は無く、綜合的に判断して樋口は松田と上田をアタック隊員に選んだ。ただその後五月八日CⅡで撮った心電図では、上田は変化なかったが$P_2$はより鋭高、T波は$V_1$、$V_2$、$V_3$と逆転し移行帯は$V_6$になり、右心負荷の増強を示していた。しかしこれで登頂隊員を変更することは困難であった。

一九八〇年に私はJACのチョモランマ登山隊に参加し、主に北東稜隊員の心電図を多

ツェラムへの帰途、斎藤ドクターと凍傷の上田

く撮った。ヤルン・カンの時と傾向は全く同じであった。八〇〇〇m以上で活動した隊員の心電図を六五〇〇mのABCで撮っているが、T波の逆転が$V_2$〜$V_5$まであった。しかし最後登頂し、帰路八七五〇mで無酸素でビバークしても、余裕をもって帰ってきた加藤保夫の心電図は、登頂前と後ともに変化が見られなかった。

上田と加藤の二人だけの例だが、心電図に右心負荷のパターンを見ない者は八〇〇〇m以上で無酸素ビバークするような事態になっても、耐える可能性が高く低酸素に強い体質の持主と言えるだろう。

ヤルン・カンの心電図は、中島が一九七〇年のエベレストの時の心電図と比較して時報八号に詳細に報告している。またK12峰遠征記（中公出版）に私がヤルン・カンとK12峰隊員の心電図の変化をまとめ報告した。

## 高所障碍の二例の治療

四月九日CIで発症したミンマ・ノルの高所肺水腫と松沢の高度全身浮腫の二例を経験した。

高地民族でヒマラヤ登山経験の多いシェルパでも、五〇〇〇〜六〇〇〇mで重篤な高所障碍を起す可能性がある。一九九〇年のシシャパンマでも五〇〇〇mのBCで、ドイツ隊のサーダーが肺水腫を起し治療した。

一九七〇年代は高山病の知識、治療対策の研究は緒に就いたばかりだった。今は常識化している高山病の予防治療薬のダイアモックスも、知られてはいたが実際使用例は聞いていない。

ステロイドホルモンの効果の報告があり、一九七〇年のJACエベレスト隊は持参使用している。ヤルン・カンでも始めてだったがデキサメサゾンを用意した。ミンマ・ノルの治療は酸素吸入、点滴による補液、強心剤、抗生剤を注射、そして九日デキサメサゾン一〇mg、一〇日、一一日五mgを注射している。一〇日、一一日と症状が少し良くなったのは、デキサメサゾンの効果だったかも知れない。一九九〇年代になって重篤な高所障碍に対し、酸素吸入は勿論だがデキサメサゾンの注射のおおきな効果が知られてきた。欧米等の登山隊は必携しているようだ。日本は医師、看護師以外注射は禁じられているので、医師が同行しない隊は持参していない。現在では緊急事態では、デキサメサゾン、ダイアモックス、ニフェジピンの錠剤の屯用がよいとされている。

## 全身浮腫

ヒマラヤで浮腫の発生を具体的に報告したのは、AACKのチョゴリザが始めかも知れない。一九五六年のJACのマナスルの報告書では、医療報告の所に「また高所では浮腫を起すことがある」と一行記載されているだけである。チョゴリザで荷上げに疲れきった足どりで下ってきた岩坪と芳賀を見て、桑原隊長は著書「チョゴリザ登頂」に次のように記載している。「二人の顔を見て私はドキッとした。顔にむくみがきて、まん円く、目がどこにあるのか、汚れたお月さんのような顔だ。握手した手も、若い女の手のように白い。」二人は食欲もあり、その夜からひっきりなしに尿がでて、しぼんでしまった。

サルトロ・カンリで心電計を持ちあげたのは、このむくみが心臓に関係しているか調べてみようと考えたからである。サルトロでは平井に浮腫が起った。電解質のバランスのことを考えて、利尿剤を使わず安静で治した。四日かかった。

ヤルン・カンで松沢は四月二日よりCI、CIIの工作に従事して八日BCに下りた。その時疲労と浮腫を自覚した。一〇日、一一日と浮腫の時飲むように指示された小柴胡湯と五苓散（柴苓湯）を服用、排尿があった。一二日ミンマ・ノルの状態が落着き松沢を診た。ひどい全身の浮腫である。午前中二回柴苓湯投与して尿量二六〇〇ml、午後一時ラシックス四〇mg一錠投与して尿量三二五〇ml、更にもう一錠投与して尿量二七〇〇ml、一日尿量八六五〇mlになった。浮腫消失、CI往復二回して前線に復帰した。登頂態勢期にCIII要員であった。

その後ヒマラヤで一日尿量八六五〇mlもあったような報告は知らない。多分知識が広まって、浮腫があると早い目にラシックスを服用するためかも知れない。

二年後のK12峰では、岩坪と奥に浮腫が起り、二人ともラシックス一錠二回服用して消失、岩坪はその時一日尿量五六〇〇mlあった。

高所浮腫の発生のメカニズムは、根本は低酸素だが今でも明らかにされていない。心電図より見て心臓が原因とは言えない。あとは

一過性の腎障碍、利尿ホルモンの関与が考えられるが、いずれにしろラシックスがよく効く。ラシックスの服用が高山病の予防になることは否定的になっている。ただ肺水腫、脳浮腫の治療時には併用されている。顔や下腿に浮腫があり尿量が減ってくれば、早い目にラシックス二〇mg一～二錠服用したほうがよい。

私の経験だが一九九〇年のシシャパンマのＡＢＣで浮腫があった。ラシックス二〇mg一錠を二日服用した。尿が出て浮腫はとれ、疲労感が無くなり積極性が出てきた。

折角のヤルン・カン四〇周年に書く機会を与えられたので、あと西堀総隊長のこと、高木と二人でのツェラムからダーランまでのキャラバンを書き残したいと思う。

## ヤルン・カン後、わたしの四〇年

上田　豊

あれから後のわたしの時間は、消えていても何の不思議もなかった。この世に引き戻してくれたおかげで時がつながり、四〇年を加えてきた。この稿を書き始めた日は、たまたま登頂日の五月一四日。いただいた四〇年を一〇年ずつ振り返ってみたい。それはちょうど、わたしの三〇才台に入ってからの一〇年区切りにあたる。

### 1　ヤルン・カン直結の一〇年（一九七三～八三）

凍傷の手術治療の翌一九七四年四月から氷河調査でヒマラヤに復帰し、半年余りネパールで暮らした。ヤルン・カンの遭難がなければ、そのまま現地で井上治郎と共に合流する予定だったプロジェクトが続いていた。調査したクンブ地域では、ヤルン・カンのシェルパのほとんどと再会でき、自宅に招かれたりした。うち何人かとは、調査行をともにし、登山隊とは違った親しい付きあいができた。

登山靴は、指が全部無くなった足のサイズに合わせて新調していった。だが、底面積が小さいので、コロコロして不安定だった。帰国後、もとの古い靴にアイゼンを付け、近所の土の斜面でトラバースなどのステップの置き方を工夫した。こうして、並みの雪斜面なら、しっかり歩ける自信ができた。

この一〇年間には、氷河調査でネパールへ六回行った。井上が見つけたクンブ南の小さい氷河に、わたしは一九七八年夏のモンスーン期をはさんで半年ほど滞在し、翌年春と秋の短期調査を加えた。こうして、ヒマラヤの特徴である、夏の雪で涵養される氷河の質量収支の特性を研究した。

一九四〇年頃からこの頃まで、地球は寒冷化してきて小氷期に向かいつつあるとさえ言われていた。そのあと温暖化が問題になってくるが、それまで夏に雪で降っていたのが雨に変われば、氷河への影響は大きい。ヒマラヤの氷河変動は欧米の氷河よりも気温変化に敏感なことを、わたしの研究は示した。

ネパール調査の六回目では、アンナプルナ連峰一周もでき、一九六四年に初めてヒマラヤで登ったガネッシュ峰の感傷旅行にもなった。道中でヤルン・カン隊のサーダー、カルマを偶然見つけ、二人でポリバケツ一杯のチャンを飲み干した。それまでカトマンズの彼の自宅を訪ねたりしていたが、これが彼と会えた最後になろうとは（参考1）。

一九八一年、門戸が開かれた中国・天山の氷河に行けたのも幸運だった。汚れくたびれたヤルン・カン隊の羽毛服を着ていたわたしを見かねた他の日本隊の登山用具店長が、帰国後リッチな羽毛服を送ってくれた。

一三年間の大学・大学院生の足を洗って山口大学に職を得たのが一九七五年。ずっと迷っていたが、やっぱり書こうと『残照のヤルン・カン』の執筆にとりかかった。はじめから決めてあったこのタイトルは、中公新書で刊行される七九年まで、書きつづける気持の支えになった。この間の色々なことは、本の「おわりに」に思いを込めて書きしるした。

編集担当者はわたしの原稿を、コーナー台地での松田さんの葬儀までで切るようにすすめた。モーリス・エルゾーグ氏とのニューデリー空港での奇遇は後書きに入れたらと言われたが、そこまでを本文に入れた。

わたしにとってこれは、まさに奇遇中の奇遇である。あれはホンマかと、本気で疑う人もいた。同行していた西堀隊長が、ヤアヤアと握手の手を差し出し、指のない手をつかみそこねて驚いていたから、間違いはない。

ヤルン・カンの重苦しさを背負った一〇年

だったが、氷河調査が軌道に乗り、念願の本も出せ、就職、結婚、娘たちも生まれた。西の京都ともよばれる山口での生活も良い思い出になった。

## 2　特に忙しかった四〇才台（一九八三～九三）

次の一〇年間は、わたしの人生で最も多忙であった。一九八四年一一月から八六年三月まで第二六次南極越冬隊、帰国の半年後に名古屋大学へ転勤、八七年西崑崙氷河調査、天安門事件の八九年に東南チベット調査、九二年の中央チベット調査とつづいた。

南極ブラットニーパネ初？登頂（1986）

南極では二度目の越冬だったが、今回は海岸の昭和基地は一泊だけ。内陸行動に徹して一三ヵ月余りを雪原で暮らした。二夏目の調査旅行では、南極で二番目に高い未知の氷床ドーム頂上を探索した。海原のように平坦な雪原で地平線の測量をくりかえして到達し、位置・標高（三八〇七m）を決定できた。

思うに、極点初到達の場合は、既定のゴールへの極めて困難な行進、つまり探検よりも冒険の色が濃いと思う。その七〇余年後にさやかながらも、不定のゴールを地理的に「探り検べる」おもしろさを純粋に味わえたのは幸せだった。この越冬旅行記『未踏の南極ドームを探る』（成山堂書店、二〇一二）を執筆・刊行できたのは、定年退職後になる（参考2）。

大学院を過ごした名大に戻ってすぐに、西崑崙隊の、大がかりな募金を要する準備に忙殺された。中側二二人・日側一一人の研究者、中側二七人の行動支援隊員による、中国科学院との大規模な共同調査で、日本のテレビ番組作成班四人も加わった。

調査の主な対象はチョンス氷帽。その頂上（六五三〇m）は、スノーモービルであっけなく初登頂した。だが後日、肩から頂上へ一人で歩いて登り直した。

崑崙の南に広がるチベット高原は、山岳部員のころ、潜入してでも行きたい禁断の地だった。西崑崙調査のあと、ヒマラヤ北麓まで南下、ラサから青蔵公路を北上して今後の調査地を偵察することもできた。

天安門事件が起こった八九年六月四日の翌日、予定の東南チベット調査のため、わたしは北京へ飛んだ。中国側の共同研究者が待つ蘭州まで入ったが、日本から帰国勧告がでて、無念の涙をのんだ。

勧告が解ける日を待ち構え、八月末には出国し蘭州を出発できた。森林帯まで流下する長大な氷河は壮観だった。キャンプでダライ・ラマのノーベル平和賞決定のニュースを聞いた。柔和な中国人研究者の目が、つりあがっていた。

一九九〇年六月、シャモニでアンナプルナ初登頂四〇周年の記念祭が開かれ、世界中の八千メートル峰初登頂者が招かれた。今西壽雄さんらとわたしも招かれ、エルゾーグ氏に再会できた。ニューデリー空港での事を話してみたが、よく分らない様子。かれにしてみれば奇遇でもない一七年も前の事だ。持参した『処女峰アンナプルナ』にサインをもらった。その冒頭、For Yukata Ageta（ユタカ→ユカタ）が、おかしかった。

記念行事にモンブラン登山もあった。カンチェンジュンガ初登頂のイギリス隊のご老体たちと臨んだが、ルートの渋滞などで、早々に引上げた。少しだったが、かれらと同行できてうれしかった。

中公新書の『残照のヤルン・カン』は、とうに絶版で手持ちもわずかになっていた。出版当時の編集者に、少しでも残っていないかとたずねてみたところ、それなら中公文庫で出しましょう、ということになった。

副題「未踏の八千メートル峰登頂記」を付け、夕陽に照らされたヤルン・カンの写真をカバーにし、語句を数十ヵ所修正して

一九九一年に再版された。文庫版へのあとがきに書いたが、この年、梅里雪山で井上らが消息を絶ち、ヤルン・カンのメンバー一五人のうち過半数が亡くなってしまった。

翌年、同じ中公文庫で伊藤愿訳パウル・バウアー著『ヒマラヤに挑戦して』の復刻版が出版された。同書の巻末に「解説」をたのまれ、伊藤さんのこと、ヤルン・カンでのことも書き加えた。

## 3　懐かしい再訪が続いた五〇才台（一九九三～二〇〇三）

一九九四年一一月から九五年三月までの第三六次南極観測隊・夏隊で、一〇年前に見つけて名付けた「ドームふじ」を再訪した。ここでの氷床深層掘削計画が実現し、極寒の高所で初めて越冬する九人を送り込むためだった。一〇年前には、こんなことが現実になろうとは、思いもよらなかった。ドーム基地で、阪神・淡路大震災の発生を知った。

一九九六年には、ネパールでわたしが最も詳しく観測したクンブ南の氷河を、当時、親身になって助けてくれたシェルパと一七年ぶりに再訪した。これまで仲間が観測を継続していたが、久しぶりの氷河は、やせ細っていた。地球温暖化のもと、いずれは消失するのだろうか（参考3）。

一九九七年、ブータンを氷河調査の交渉のため訪問。翌年、ブータンとの継続的な協力プロジェクトとして、当時ヒマラヤで社会問題にもなってきた氷河湖決壊洪水に関する調査が実現した。初回はブータン・ヒマラヤを広域的に踏査することにした。三〇年前、ブータン・ヒマラヤを目ざし、インド外務省との交渉のため、ニューデリーで半年ねばった。結局、山には入れなかった無念を、今回、別の形で晴らすことになった。

この時わたしは五五才。四、五千メートル級の峠を一〇以上越え、五〇〇キロ近く歩き、ずい分くたびれた。だが、かつて焦がれた山々と氷河に充たされた旅だった（参考4）。五年後に再訪した際、山中のキャンプで還暦の誕生日を祝ってもらえた。決壊洪水のおそれがある氷河湖は、この数年で拡大していた。

二〇〇〇年の年末から年始にかけては、一家五人でネパールへ行った。チャーター機でカンチェンジュンガ山塊まで飛び、ヤルン・カンを間近に見た。二〇世紀が終る前、一二月三〇日のことだった。

二〇〇三年一月五日は、わたしが生れた日からヤルン・カンで救出された日までの日数を、救出日から同じ数だけ重ねた日にあたる。特に理由はないのだが、日数計算をしてその日を迎え、不思議な感慨をもって通り過ぎた。

## 4　六〇才台に入った回帰の一〇年（二〇〇三～一三）

二〇〇四年秋、ネパールで三〇年前から氷河変動を観測しているクンブ地域を再訪した。わたしにとって二八年ぶりだった。ここは、わたしたちのフィールド・ワークの原点であるが、二年後に定年の自分には、フィールドの最終の地にもなった。

かつて、石積み小屋の住まいと気象観測露場を設けて基地にしたハジュン（四四二〇m）を訪ねた。廃墟と化した基地は、のべ一〇ヵ月ほど暮らして格別な思いがある。当時助けてくれたシェルパの姉妹も、歳を重ねて貫録充分の熟女になっていた。ヤルン・カンからここで出直した三〇才台初め頃の情景が、懐かしく思い浮かんだ。かつて観測した氷河たちの姿は変貌し、衰退していた。「星霜」という言葉を、三〇年を経てしみじみと実感した旅だった。

二〇〇七年春、名大を定年退職。わたしの研究室には、京大山岳部OBがスタッフ・院生あわせて五人在籍した。大学院留学生は、

金色のヤルン・カン（名大氷雪圏研究室 2007）

ネパール五人、ブータン一人、中国二人。ネパールとブータンの修了生は、自国の氷河湖決壊対策にも貢献した。何よりもありがたいのは、関係した調査隊で、悲しい事故が起こることなく過ぎたことだ。

退職した年の晩秋、新聞社の小型ジェット機によるネパール空撮に加えてもらえた。氷河変動をとらえるフライトで、地上でも確認してきた氷河縮小だけでなく、ヒマラヤ襞の衰退など、景観の劣化が現実になりつつあることを知った（参考5）。夕暮れのカンチェンジュンガ飛行では、残照に染まるヤルン・カンを上空一万メートルから鳥瞰し、カメラにも捉えた。天にも昇る気持だった。

退職後は、北播磨にある妻の実家で暮らしている。田畑に接した再生古民家に住み、米・野菜は自給の生活だ。南極越冬記を書き上げてから、念願のチェロを習い始めた。ヤルン・カンの凍傷では、弦を押さえる左手の指は健在。右手は親指が残っているので、弓をわしづかみにして弾けるのだ。

今年はヤルン・カンの西堀隊長の生誕一一〇周年で、初登頂四〇周年でもある。そこで記念展を開きたいと、滋賀県の「探検の殿堂」から協力を頼まれた。ありがたい企画である。

登頂したピッケルと頂上からの帰途に落として回収され、その後の調査にも愛用したザックを、写真パネルと共に、一九六四年ガネッシュ隊の梱包用木箱に入れて送った。いずれ処分せざるをえない物だったので、不要になれば返却せずに処分をお願いした。すると送った物すべてが、寄贈あつかいで保管されることになった。重ねてありがたことだ。

この五月になって、『残照のヤルン・カン』を特別な思いで読み返した。そこには、三一才のままの松田さんがいた。四〇年前の自分もいた。本を書いておくと、当時の自分を整頓して定着しておける。来年は『ガネッシュの蒼い氷』で五〇年前に、再来年は『未踏の南極ドームを探る』で三〇年前に帰ることができる。

ヤルン・カン隊のとき西堀隊長は七〇才。わたしも今年で七〇になる。とりとめなく書いてきたが、この四〇年は、多くの方々のおかげで成り立っている。お名前は書かなかったが、心からの感謝をお伝えしたい。

**参考記事**：AACKニュースレター掲載

1 「ヤルン・カンのサーダー・カルマ、四年おくれの訃報」三三号、二〇〇四

2 図書紹介、五九号、二〇一二

3 「縮小加速・・ヒマラヤの氷河とAACK」七号、一九九七

4 「ブータン氷河湖決壊洪水調査記」一四号、一九九九

5 「空撮で見たヒマラヤの変貌」四五号、二〇〇八

# ヤルン・カン（遠い記憶）

甲斐邦男

## 一　カルカッタからダランバザール

ジローを隊長とする先発隊（カイ、グロン、ゼンカ）は一九七三年一月二三日に京都を新幹線で出発した。西堀先生の自宅で夕食をごちそうになり、ゼンカの実家に泊めていただいた。翌日（一月二四日）の早朝に、羽田から南回りの各駅停車便で香港、バンコックを経由して、ニューデリに到着したのは深夜であった。当時は航空便で出発するなど画期的なことで、ジローを除くと初めての海外渡航であった。バンコックまでは多少の乗客が乗っていたが、ニューデリまでは貸切のような状況であった。翌日（一月二五日）に先発隊はカトマンズ組（グロン、ゼンカ）とカルカッタ（現コルカタ）組（ジロー、カイ）に分かれて、それぞれの目的地に空路出発した。カルカッタ組は、船便荷物の通関と受取を行い、ネパールのダランで荷物とともに合流する予定であった。

カルカッタでは、予定していたホテルが満員で取れなかったので、ソルティ-オベロイというホテルに宿泊した。ホテルは植民地風の伝統のある古い建物で、高い天井に大きな扇風機がゆっくりと回っていた。ホテルは、フォートウイリアムのあるマイダン公園に面し、その後ろに一九世紀からのオペラハウスがあるカルカッタの中心街に立地していた。立地は良好であるが、部屋が暗いこと、部屋

を空けて外出した途端に執務員の荷物チェックがあったことなどから、できるだけ早く予定していたホテルに移動するようにジローに示唆された。その晩は通関業者とレストランで夕食を取り、通関準備の打ち合せを行った。夕食の初めてのインド料理は旨く、この程度なら今後の食事は大丈夫と思った。食後、暗いレストランを後にして、街灯もなく、ビルの窓の光もない真っ暗闇のカルカッタの町を歩いてホテルに戻った。

ジローは一九七〇年日本山岳会のエベレスト登山隊で通関に関わり、その経験に基づく通関手続きをカイに教えた後、一月二六日に空路カトマンズに移動した。カイ一人がカルカッタに残り、ジローの指示に従い、通関手続きを開始した。船の到着と通関までは一～二週間かかるので、まずは、当初予定していたリットンホテルに交渉して、ホテルを移ることができた。リットンホテルは、ソルティオベロイから近く、カルカッタ博物館の横にあり、先ほどのホテルとは異なり、開放的で明るいホテルで、ここならば快適に滞在できそうだった。

翌日（一月二七日）から通関のため、通関業者を伴い税関に行き、また、カルカッタ領事館、三井ＯＳＫ事務所を訪問した。通関は業者がやってくれるのであるが、通関に必要な書類を税関からもらうために、税関内をあっちへ行ったり、こっちへ行ったりして、全くわからないままにうろうろし、一日一通の書類が手に入れば上出来であった。もっとも、船がまだ到着していないので、日時は十分にあるので、カルカッタの役所に付き合って、ゆるゆると手続きを進めていたが、ともかく、書類の受取は遅々として進行しなかった。

一月三〇日にゼンカがカトマンズからカルカッタに到着し、二人で通関を行うことになった。程なく通関書類を入手できたが、肝心の船がなかなか到着しなかった。三井ＯＳＫのカルカッタ事務所を再度訪問すると、事務所は、日本人一名とインド人秘書の女性が一人で、事務所の高い天井に大きな扇風機がゆっくりと回り、日本人は水の入ったバケツに足を浸けて、扇子で扇ぎながらモンスーン前の猛暑を凌いでいた。三井ＯＳＫの話では、カルカッタ港は河口から一五〇㎞のガンジス河支流のフーグリ川の下流に位置しているので、大型船の入港は、潮の干満、河川の水量と浚渫、船の吃水の影響を受け、いつ入港できるのかわからない、カルカッタで下す荷物の量によっては順番通りに寄港しないことがあると脅され、通関担当としては、きわめて不安な気持ちになった。

通関に関する書類は一応入手して、後は船の到着を待つだけとなったが、船はなかなか到着する様子もなく、カルカッタで時間つぶしの見物とした。と言っても、隊の費用は使えないし、貧乏学生ではタクシー代も難しいので、ホテル周辺をうろうろする。隣のカルカッタ博物館、動物園、植物園、国際市場それから、ジローが推薦したハウラー駅などである。ハウラー駅は、通勤時間帯に行けば、群衆が次々と湧くように現れるから、是非見ておけと言うジローからの推薦であった。また、カルカッタの市街地をうろうろと歩き、工事現場で作業分担を見て、これがカーストと言うのかなとか、破れた水道管からの水で遊ぶ子供たちを見て、これがインドかなあとか考えたりした。朝食はホテル代に含まれているのでホテルで済ましたが、昼食や夕食は大通りに面した大衆食堂で数ルピアの食事とした。貧乏な節約生活であったが、地べたを歩くのは快適であった。

船は二月九日にカルカッタ港に入港したが、船を待つ者にとっては、一週間以上遅れたような気がする。船が入港するまでの間、日本への電話連絡は全く不通で、連絡は電報、郵便であり、本隊がカトマンズに到着の後は、一応電話連絡は可能であったが、不通となることが多かった。カルカッタへの入港や荷揚げの遅延もあって、荷物の受取は予定より遅れ、カルカッタ組は頼りにならないとの本隊の判断から、二月一一日にカトマンズからカミヤマが応援のためにやってきた。休祭日が重なり通関に日時がかかったが、一四日に通関を完了して、一月初旬に発送した荷物と再会した。ネパールキャリアと言う運送業者が荷物を人力でトラックに移動させ、いよいよネパールに向けて出発となったが、今度はネパールキャリアによるトラックの準備がなかなかできず、出発が遅れることとなった。カミヤマと運送業者との交渉で、全部ではないが一部のトラックがなんとか準備できた。残りはこの後すぐ調達準備できるということで、一五日の夕方に先発二台にカイが乗

り、ネパールの国境に向けて出発した。次の三台目にゼンカが乗り、先発三台は一五日に出発できた。最後の二台も今日中に調達でき、カミヤマが乗るはずであった。

夕闇せまるカルカッタの雑踏を抜けて、トラックはガンジス平野を北に向かいひたすら走った。そのうちに真っ暗な夜となり、対向車は遠くからライトを上げて、一車線の道路をこちらに向かって来る。トラックが近づくと、ライトを消し、共に未舗装の路肩に大きく傾いて、横転するのではないかと思いながらすれ違う。行けども、行けども、真っ暗な平原で、遠くに裸電球と思われる集落の明かりが見え、太鼓の音が響いてくる。明け方に大きな河をたよりない橋で渡り、これがガンジス河の上流である。途中は、夜中、朝、昼にトラックの運転手がドライブインのような地元露店で果物と飲み物を買ってくれた。翌日もひたすら北上して、夕方暗くなってから国境の町のジョクバニに一六日中に到着できた。二四時間以上かけて、ガンジスデルタを走り、標高七〇mのデルタ端の近くに到着した。

やっと通関の仕事は終わり、本隊と合流できると思ったが、この時に大きな誤りがあった。ジローからなんども言われていた「先頭車に通関書類を持って出ろ。」と言うことであった。トラックの手配のドサクサのために、書類の確認ができなかった。先発としては、この後すぐにトラックが続き、国境までに追いつくという認識であったが、実際に最後のトラックが出発できたのは、翌日一六日となってしまっていた。インド国内の州境では、後続車が書類を持ってくるということで、州境は通過できたが、ネパールとインドのビラトナガールのジョクバニの国境は通過できなかった。

ジョグバニには、ネパールキャリアの事務所があり、そこのオッサンに後続車はすぐに来る、通関は問題なくできると慰められて、ホテルだか、そのオッサンの自宅かに泊めてもらうことになった。夜遅くなって、隊員が訪ねてきてくれた。通関書類の失敗で、もうふらふらで、誰だったのか、また、この後の通関のことは完全に忘れている。最後の後続車は一七日に到着し、書類が運ばれてきて、通関はすぐに済んだ。ジョグバニとネパールのビラトナガールは一続きの国境の町であり、税関を通ればすぐそこにあった。

## 二　八〇〇〇m

### 二・一　主稜線偵察

サプティコシ川の扇状地の標高三〇〇mダランを二月二〇日にキャラバンは出発した。まず、前ヒマラヤのシャングリラ峠を越え、再び、サプテイ川上流のほぼ同じ標高のレウテイコーラ川に降りる。その後、尾根筋や谷を越えて、ベースキャンプに集結したのは四月二日で、約四〇日の長い行程であった。カイがBCに入ったのは、隊員のなかでは最後であり、すでに、ルート工作は始まっていた。後は、ひたすら荷揚げをしたような気がしている。記録によれば、実際はC4偵察とルート工作やC5偵察を行っているが、全く記憶はない。ともかく、指令通り荷揚げをして、時には三〇kg近くの荷物を背負っていた。荷揚げの進捗状況は、よくわからなかったが、最終キャンプC5への荷揚げが計画通りに進んでいないようであった。

ヤルン・カンの登頂ルートは、雪稜ルートであり、七九五〇mのC5から急斜面を大きくトラバースして雪稜に達し、そこから雪面と岩場の急斜面の「すべり台」を登攀し、途中から前衛峰の下部の雪面を頂上側にトラバースして、コルを通って頂上に達している。雪稜ルートは当初の登頂計画ルートであるが、「すべり台」の上から頂上までのルートは見えなくて、未知である。これ以外に可能性のあるルートは、西尾根を直登し、前衛

ヤルン・カン登攀ルート
（1978 氷河調査空撮）

峰とその前に聳える灰色の岩峰を捲いて、稜線伝いに登る稜線ルートである。この稜線ルートの問題点は灰色の岩峰とその後ろの前衛峰をうまく捲けるルートがあるかどうかである。

五月一一日にC4（七四四〇m）で会議があり、最終的な登攀計画が決定された。会議の結果については、カイの全く記憶の外にあるが、カイ、グロンはC4からC5地点を経由して、上部ルートを偵察することとなった。C5への荷揚げが予定通り進んでいないこともあり、できるだけ短期に登頂を目指すためには、稜線ルートは捨てがたかったようである。

五月一二日にカイ、グロンは、空身でC4を出発し、C5予定地点を通過し、主稜線まで達し、登頂ルートを偵察した。C5地点への途中で、デポ地で回収したザイルでルート工作をしながら、C5地点に一三時三〇分に到達した。C5地点からのルートについて、グロンの報告書によれば、雪稜ルートを行けば、雪稜の偵察に終わるが、稜線ルートの可能性が高いために、主稜線へのルートを選択、登行したと、書いている。偵察隊のこのルートの選択について、カイには全く記憶にない。

C5地点から雪と岩の斜面をひたすら主稜線に向かって、一四時に登り始めた。カンチェンジュンガ主峰、ヤルン・カン、カンバチェンに続く主稜線にはあっという間に到着した。一五時である。標高は八一〇〇m以上と思われる。主稜線の北側斜面は見えないが、その下には蒼氷からなる数段の平坦なカンチェンジュンガ氷河が広がっていた。北東にはカンチェンジュンガ主峰から延びる稜線上にツウィンズなどの山々、西方にはカンバチェンやジャヌーが下に見下ろせた。ヤルン・カンに取りついて以来、初めて見る北側の風景である。主稜線には巨岩が重なり、巨岩と巨岩の間は急斜面の深い谷となっている。灰色の岩壁に近づくように主稜線を歩くことは容易ではないので、数mの巨岩を岩登し、巨岩の上から主稜線周辺を偵察したことは記憶している。一五時四五分に稜線から下りはじめ、一六時四五分にC5地点に戻った。C5地点で雪面を削って、テント場の多少の整地を行い、一七時に荷揚げ隊と合流して、C4に下り始めた。

主稜線までの偵察で、カイ、グロンとしては、荷揚げから解放され、これまで誰も歩いたことのない八〇〇〇mの斜面を歩き、主稜線上で岩登りをし、見たかった稜線ルートや主稜線の向こう側を望み、周辺の山々を見下ろすことができた。この主稜線までの偵察は非常に楽しく、これがヒマラヤの八〇〇〇m峰の登山かと感激する一方で、ガスが来る前に、早くキャンプ地まで戻らなければと恐怖心を持ったことを覚えている。この点、グロンは意外と平気なようで、着々と写真を撮っていた。

偵察から、稜線上の灰色の岩壁はヤルン氷河側もカンチェンジュンガ氷河側も岩壁が障害のように広がり、また、前衛峰までは岩稜が続き、登行は難しいことがわかった。ポッポの報告書では、この結果から雪稜ルートから「すべり台」を経由して前衛峰の下の主稜線に直接登るルートが避けられたとされている。

この偵察で、登頂ルートが確定し、それなりに成果があったとされているが、この偵察は本当に必要だったのか、偵察ルートは正しかったと、思っていた。帰国直後に、地質のカイの担当教授に主稜線の地形を話したところ、ヒマラヤなどの高山の稜線には風化や浸食から地質的時間に耐えた巨岩が残っているのが通常であると、教授は納得していた。ヒマラヤと同じ変動帯の日本の山々でも、頂上や頂上近くには岩峰が露出していることや、稜線上の巨岩が登行の障害になっていることは十分に知っていたはずである。

また、今から考えると、ヤルン・カンの主稜線の灰色の岩壁の北側に雪面で埋まるようなルートがあるのは、きわめて稀であり、また、主稜線上の前衛峰にも雪面のルートがある確率は低く、容易な登攀ルートを期待すること自体に無理がある。両ルートともに上部は未知であって、未知と言う点では同じであるが、低い確率の稜線ルートを期待するよりは、南面の雪稜ルートを偵察して、ルート工作やトレースを付けて、アタック隊の登頂の助けとなるようにした方が、より有効的ではなかったかと。

偵察ルートの選択について、適切であったか不安に思い、当時の記憶と当時の資料で検討した。当時の計画登頂ルートは雪稜ルートであったが、稜線ルートは灰色の岩壁と前衛峰を捲けるルートが見つかれば、雪稜ルート

より、容易で短期で登行できるルートであると、当時思われていた。稜線ルートはあまりにも魅力的に見え、偵察が出る時点では、登頂ルートは決定できていなかった。主稜線に達すれば、灰色の岩壁や前衛峰の登行など稜線ルートについて少なくとも明瞭な結論が得られ、うまくいけば雪稜ルートの「すべり台」から頂上までのルートが見えると考え、主稜線まで登ることにしたと思われる。偵察ルートの計画はどうであったかわからないが、少なくともカイは当初から主稜線まで達する気持ちであったと思う。偵察ルートの選択について、今、納得ができた。偵察隊は、報告書にあるように主稜線偵察隊であって、ルート工作隊ではなく、未知の両ルートを偵察するには、主稜線に達するルートしかなかった。

## 二・二　救援

C5は五月一三日に前日に荷揚げした物と当日に荷揚げした物とを合わせて設置された。この日には、カイ、グロンは下山路の確保のために、C5へのルート工作を行ったようであるが、全く記憶にはない。翌五月一四日にアタック隊が出発した。雪稜からの登頂ルートは、ヤルン氷河側ではBCはじめ多くのキャンプ地からよく望めるが、主稜線近くになると、北側のカンチェンジュンガ氷河側に回りこむのか、見えなくなる。後は、再び、ヤルン氷河側に姿が現れるのを待つだけである。アタック当日の一四日はC4にて休養と記録ではなっているが、カイ、グロンは、何を考えて、何をしていたのか、今となっては、全く記憶がない。アタック隊は当日にC5まで戻れず、ビバークすることとなったようであるが、その晩から翌日の昼にC5まで到着するまでの記憶は全くない。グロンの報告書では、翌朝にトミタに起こされたと記されていて、八〇〇〇mでのビバークが何を意味しているのか、カイ、グロンともに多分理解していなかったのだろう。

五月一五日にカイ、グロンはC4を出発して、C5に一三時ころに到着した。C5にいるパンネが岩壁の雪面にいるポッポを見つけ、カイ、グロンはポッポのいる雪田を確認して、あそこまでならば今日中に到着できると思ったことは記憶している。その後はBCの指示に従って、活動したはずである。

一四時一五分にC5を出発して、途中で急な雪面を往復して、ポッポが落としたザックを回収して、一六時に雪稜に着いた。覚えているのは、長い雪面のトラバースを経て、雪稜に着き、雪稜から大きな声をかけたところ、ポッポから返事があり、後は雪と岩の急斜面をひたすらポッポ目指して、カイ、グロン、ニマで登ったことである。

雪稜から雪と岩の広いクロワール状の斜面「すべり台」に入ると、先のルートやポッポのいる岩壁の位置は全くわからなくなる。ともかくポッポを見つけて、そこまで到着することであり、気持ちだけは急いだような気がしている。ポッポがいるはずの左上方に注意しながら、登っていると、夕闇のガスの中にヘッドランプの光でポッポを発見できた。合流した時間は一九時三〇分であったらしい。ポッポは正常な様子であったが、BCの指示により、ザイルでデポ地点に確保した。

BCの指示により、もう一人のランプの救援である。本日の午前中の位置は確認されたが、現在のランプの位置はわからない。カイ、グロンともにランプのいた位置は知らないが、ともかく上に登って行くしかない。暗闇のなかで、岩壁が迫り、ルートがわからないだけでなく、われわれの現在の位置もよくわからないので、BCの指示に従って、ルートを選んでいく。ともかく先が見えない。そのうちに、雪に突き刺さったピッケルの石突を発見した。これはランプのものであろうが、ピッケルを落とすことはありうるが、転落したとは全く考えず、ともかく上に向かうことしか考えなかった。雪面の中を進むと、上部に岩が被さった急雪面に出た。BCからの指示によれば、この上の雪田テラスに、今日の午前中はランプがいたらしい。この斜面を登るのが困難であったことは記憶にあり、記録によれば、この時点でカイの酸素ボンベが空になった。雪田テラスに到着できないが、BCの状況判断で、ここで一次救援は中止することとなった。最後に、大きな声でランプを呼んだことは覚えている。

ランプの姿を確認していれば、カイ、グロンはそこまで行ったと思う。ただ、若い有能なニマはすでに限界に達して動けなくなっていて、ポッポのところに残っている。カイの酸素も切れ、カイ、グロンも限界であったことは確かで、この時点でランプから返事があったとしても、その位置まで行けたかどう

かは、わからない。われわれは、姿の見えていたポッポのところまでと思い、そこに到達できるように最大の努力をした。ポッポと合流した後、姿の見えないランプを展望のきかないこの斜面のなかでどのようにして救援できるのか、不安に感じていた。これ以上ここに留まるとどうなるのかという恐怖と、ランプを見捨てるのかという気持ちが交錯していたことは記憶している。

ともかく、カイ、グロンは活動を終了して、二〇時三〇分にポッポとニマの待つテラスに戻った。ポッポ以外の酸素はすでに空になっていたが、下山では必要がない。問題はポッポのアイゼンの片方がないことであった。カイがラストで降りれば、ポッポが滑っても、ザイルで止められるという理由がわからない変な自信があり、ポッポは片方のアイゼンで降りることを、独断で決定した。グロン、ニマ、ポッポ、カイの順番でザイルを組み、ワンアッタタイムやコンテニアスを組み合わせて、急な雪と岩の斜面を下る。これから陽は暮れないので、ゆっくり帰るようにBCから励ましがあった。翌日の五月一六日二時に雪稜に着き、ほっとする。雪稜からは長い急な雪面をトラバースして、四時にC5に到着した。

下山の途中、最後尾を歩いているカイの後ろに足音がする。こちらが止まると足音も止まる。雪稜からの雪面のトラバースでは足音が一層明瞭に聞こえる。ランプがついてきているのかと思い、振り返ったが、だれもいなかった。C5に近づくと足音は消えてなくなった。後日、グロンに足音がついてこなかったか確認したところ、グロンも五人で降りていると思っていたらしい。共同で見た幻聴のようで、さらに後日、このようなことは実際に登頂した後にあるように聞いた。

五月一六日にはトミタ、ゼンカの二次救援隊が捜索を行ったが、ランプは発見できなかった。ポッポ、カイ、グロン、ニマはC5で休養の後、C3まで下る。カイは、C3に下る途中から目がかすみ出した。酸素不足の影響が出てきたようである。カイは一七日にBCまで下ったが、記憶は全くない。グロンは一七日にC3に留まり、翌日一八日にBCに戻り、カイ、グロンのヤルン・カン登山活動は終わった。一七日に救援活動は断念された。五月一九日からBCの撤収がはじまり、いくつかの隊に分かれて、長いキャラバンルートを逆に戻り、全員ダランに結集したのは六月一三日である。帰りのキャラバンについては記憶が全くなく、記憶があるのはダランで激しい下痢をしたことぐらいである。

## 三　後書き

はじめての外国であるカルカッタは、聞いてはいたが、雑踏、貧困、騒音などで、大きなカルチャーショックを受けた。それに比べて、ネパールは貧しくはあったが、天国のように感じた。ネパールのポーターのツァンパと唐辛子の食事など現地の生活はすべてが驚きであった。帰国後報告書作成などに携わったが、本当の意味でヤルン・カンについて考えることは、これまでなかった。その理由は、私自身はヤルン・カンの登頂には、ほとんど役に立たなかったという思いがあるからだと思う。ここに書いたことは、私が今でも強く記憶している当時の事柄であり、それ以外はほとんど忘れてしまっている。

まず、通関が遅れたことである。通関手続き全体が適切な処理をしていたかどうかは、わからない。また、ビラトナガールで少なくとも一日の停滞を書類不備のためもたらした。ジローの教えを忠実に実行していれば、ビラトナガールでの通関は少なくとも一日早くなった。ダランへの荷物の集結が遅れたことは、後の全体行程にどのように影響したかは私にはわからないが、少なくとも私は大きなダメージを受け、隊員として失格ではないかと思った。

次いで、装備係りとして、本当に効果的な装備を準備できたかと、疑問に思う。私の担当装備は、キャラバン中のテント、燃料、キッチン、高所用のテント、燃料、キッチンであった。燃料計画では、キャラバン中は薪、氷河上のBCまでのキャンプでは薪と灯油、BCでは灯油を使うはずであったが、実際にはキャラバン中からも灯油を使うこととなり、その結果、BCでは薪となり、追加的に薪や灯油を運ぶことになった。燃料計画はキャラバン中から完全に破たんしていた。さらに、キッチン用具では、記憶のあるところでは、包丁がキャラバン途中で刃こぼれのため、すぐに使用できなくなった。高所では、軽重量のガスボンベを使用して、良好であったが、最終キャンプのC5ではブタンの少ないプロ

パン主流のガスを使用したが、強い火力が得られずに、アタック隊は早朝に出発ができなかったと聞いている。この他にも、帰国当時は装備の不具合はいろいろ聞いたが、今は完全に忘れている。

さらに、ピッケルの石突について、報告書では発見時にBCに報告したことをグロンは書いていて、私もそうであるとは思うが、今となっては記憶がない。覚えているのは、C5に戻った時にピッケルの発見をトミタに報告したことである。それは二次救援隊のためであるのか、それとも、それまでBCに伝えていなかったのか、その本意は忘れてしまった。ピッケルの石突きを見つけた時も、C5でもランプが滑落したなどとは全く思わなかったが、BCに戻った時に、BCではピッケルの情報は理解していないようで、ランプの捜索地域が変わる可能性があると指摘された。確かに、その通りであると思った。ただし、BCに戻ったのは、二次救援が終わって、ランプを発見できなかった後であるので、誰が、どれが正確なのかは、今となってはわからない。

また、ポッポが片方のアイゼンがないのにもかかわらず、私の独断で、そのまま下降した。私のアイゼンをポッポに着け、私が片方だけのアイゼンで降りる方法もあった。どちらが適正であるのか、私には今でもわからない。

ランプの救援では最善の行動を取ったつもりではあるが、ランプを見捨てたという気持ちがある。あの時にランプを見つけていれば、疲労の激しいランプを無事に下せたか？また、我々が無事に戻れたか？その時に不安に思う私がいて、今も思っていることに気がついた。やはり、見捨てたのかもしれないと。

また、報告書ではスポンサーの名前を誤って記載して、多くの人に迷惑をかけた。このほかにも、気が付いていないが、多数の誤りをやっているに違いないと思う。

最後に、この第一稿は私の当時の記憶を基に書きました。第一稿を記録やメモでチェックして修正すると、第二稿は報告書と同じような文章になり、これでは面白くないので、記憶をもとに、できるだけ報告書と整合性があるように再度修正しました。日時や時間は報告書に従いました。その結果、何のための文章か訳がわからなくなってしまいました。また、記憶違いや思い違いが多数あるかもしれません。共に活動したグロンやニマはもういないし、カルカッタで、はしゃいでいたゼンカもいません。また、撤収時に、ヤルン氷河のサイドモレインの草の茂るラムゼのキャンプで、ボヤク私を批判しながらも慰めてくれたジローもいません。私の記憶間違いを修正できる人はいなくなりました。また、多数の隊員もいなくなりました。思い出せば、反省するところは、きりがありません。

名前は呼び名で統一し、敬称は省略しました。

呼び名：氏名（年齢）　トミタ：富田幸次郎（三三才）。ランプ：松田隆雄（三一才）。カミヤマ：神山義明（三〇才）。ポッポ：上田豊（二九才）。パンネ：浅野潔（二八才）。ジロー：井上治郎（二七才）。カイ：甲斐邦男（二五才）。グロン：森本陸世（二四才）。ゼンカ：高木真一（二三才）。ニマ：ニマノルブ（二三才）。

## 遠征と遭難の日々を振り返る
### ―ヤルン・カン遠征四〇周年―

松沢哲郎

一九七三年のプレモンスーン期に、ヤルン・カン（カンチェンジュンガ西峰、八五〇五m）に行った。西堀栄三郎さんが隊長で七〇歳。わたしが最年少の隊員で二二歳。日本人隊員一五名の隊である。一九七三年五月一四日、松田隆雄と上田豊の隊員二名が登頂に成功した。帰路にルートを見失い、翌一五日に松田が転落死した。四〇年後の現在、隊員一五名のうち九名が物故し、残るのは六名である。

ヤルン・カン初登頂が、五八年のチョゴリザ、六〇年のノシャック、六二年のインドラサン、六四年のガネッシュと違うのは、登頂直後に隊員一名が遭難死したことである。しかも、それを初めとした一年三か月のあいだに、京大で二つの初登頂と四つの遭難があった。

七三年五月一五日、ヤルン・カン初登頂に続く遭難、一名死亡。

七三年八月〇日、北俣谷の転落遭難、一名死亡。

七三年一一月二〇日、槍ヶ岳中の沢の雪崩遭難、五名死亡。

七四年九月一日、K12初登頂に続く遭難、

二名死亡。

四つの遭難が国内外で続いて九名が死亡した。関係者が次々と去っていく中で、今後の検討に資するものとして、できごとの概略と、典拠となる文献（番号を○で囲む）とを記録にとどめておきたい。以下に、時系列で記録する。敬称は略する。京大山岳部（以後、山岳部）の動きは、『ルーム日誌』七八号から一四八号まで（一九六九年一月一八日から一九七六年一月五日まで）に依拠した。

## 一、ヤルン・カン前の京大山岳部と京大学士山岳会（六九年から七三年）

京大学士山岳会（以後、ＡＡＣＫ）がヤルン・カンの登山許可を最初に取得したのは一九六四年の八月だ。舟橋明賢隊長ほか八人の計画である。理由も明らかにされないまま一〇月には取り消された。シッキムの住民にとってヤルン・カンは聖なる山でありインド政府がその点を取り上げてネパール政府に申し入れをしたために許可が取り消されたのではないか。その想定のもとに交渉を続けたという。それ以来申請を出し続けるとともに、六七年に樋口と松田が偵察に出た。五月二六日、ヤルン・カンの西尾根上部、高度計で六二〇〇メートルまで登った。京都に帰ってからＡＡＣＫのルームで偵察結果に対する検討会が開かれた。四つの決定がなされた。登攀ルートは西尾根とする。登攀計画から逆算してキャラバン開始は三月一〇日とする。キャラバンルートはタプレジュン経由とする。氷河上の輸送のために、グンサとワルンチュンから人夫を集める。以上、いつ来るかもしれない許可を想定して準備していた。

六九年、学園紛争のために東大入試が無かった年にわたしたちが京大に入学してきた。高木真一は都立戸山高校の出身で、わたしは都立両国高校の出身である。当時の受験校である都立のナンバースクールと呼ばれる旧制府立中学の出身者がそろっていた。日比谷、立川、両国、戸山、西である。大学が閉鎖されていたのでクラブ活動がさかんだった。山岳部も二〇名以上の一回生がいた。六四年のガネッシュのあと、山岳部ではブータンに目が向けられていた。六八年の上田豊・市川光雄の偵察を受けて、六九年は、桑原武夫と松尾稔の率いるブータン隊が入国を果たした。七〇年に当時二回生で同回生の河合明宣が谷泰とともにブータンをめざした。その六九年入学世代は、大学の授業がないこともあいまって、ひたすら山登りをすることになる。年間の山行日数が一二〇日にもなった。その結果、われわれの回生が上級生になるにつれて山行レベルが高くなっていった。国内外に未踏の山や渓谷が残っていた時代である。三回生の秋山からリーダーシップが交代する。七一年秋、高木がリーダーでわたしがサブリーダーになった。そのリーダーになる二日前、七一年九月二〇日、高木が京大山岳部のルーム日誌にこう書き残している。

『Ｋ12はカラコルム山脈中サルトロカンリの東隣りビラフォンド氷河を隔ててそびえる七四七三ｍの未踏峰である。サルトロ遠征後ＡＡＣＫが毎年申請を出していたが許可がおりずあきらめていたところ、千葉の島澄夫隊が許可をとり、先日アタックを失敗したのは周知の事実である。即ち、許可のおりる可能性のあるてごろな山で、先週の木曜会で話を聞いたところＡＡＣＫはＫ12に申請は出すつもりはないとのこと。ここでひとつわれわれでアプリケーションを出そうではありませんか』

九月二八日経過報告『来年分のカラコルムのアプリケーションの申請時期は一一月一五日で早い者勝ちだそうです。ところで早急に隊長をつかまえてアプリケーションを出そうということになりました。シェルピカンリ、カンピレディオール、パスの順で検討』。一〇月一八日経過報告『カンピレディオール、シェルピカンリ、Ｋ12の順に変更』。さまざまな先輩に頼んで最終的に、一〇月二七日経過報告『カラコルム行について、隊長はランプさん（注、松田隆雄）になりそう』。つまり山岳部のリーダーとして高木がカラコルム遠征を計画し、松田を隊長に担ぎ出した。一一月一〇日、部室の窓から出入りする階段を高木が踏み外し、右手第四中手骨骨折。笹ヶ峰のスキー合宿のリーダーはわたしになった。

明けて七二年三月の春山で初めて高木とパーティーを組んだ。あまりに同回生の数が多いので、下級生のときの分散山行では同じ山に行くことが一度もなかった。日高のカムイエクウチカウシから一八三九ｍ無名峰への計画である。高木3、松沢3、瀬戸2、成田1、四名のスキー山行だった。七二年度を迎え、カラコルムの許可はおりず、国内山行がさかんにおこなわれた。剱岳合宿のあと、松

沢4、出水3の二名で、黒部川中流の「半月沢」を遡行した。五万分の一の地図に半月沢と書かれているだけで、まだだれも登った記録が無い。半月沢の初登攀は、この年の十大登攀のひとつとして『岩と雪』に記録された。

九月にわたしたちの回生がリーダーシップを終える。ちょうどその直前に、ヤルン・カンの遠征がもちあがった。七二年八月二八日、毎日新聞社からの通報で、ネパールの登山解禁峰三八座に、新たに東ネパールの三峰、ヤルン・カン（カンチェンジュンガ西峰）、カンバチェン、ジャヌーを追加とのことである。九月末の隊員選考をまたずに準備を始めた。それでも船積みまでの準備期間は三か月しかなかった。中核は六七年の偵察をした樋口と松田である。その松田との縁で、高木とわたしに声がかかった。遠征の恒例で、最年少隊員のわたしが食料係だった。正味の登山期間六〇日間、歩き始めるキャラバン開始から数えて一〇八日。合計四〇七一人日分の食糧を計算し、集めて、梱包する。五〇二九キログラムだった。酸素、装備、食料を用意して、募金をして、一月七日には約一〇トンの船荷を積みこんだ。

同じ九月に山岳部ではリーダーシップが三回生に交代した。リーダー出水、サブリーダー伊藤と萩尾、マネージャー瀬戸。一〇月一五日、ヤルン・カン計画と対抗するように、近藤美知夫7、藤野4、松本4、出水3、伊藤3、瀬戸3、渡辺2、平田2の八人が西カラコルムトレッキングの申請書を出すに到った。また別に、山岸5、片山5を中心に、北極圏のエルズミア島への遠征が計画された。

山登りのスタイルや、山岳部という組織そのものの存在意義が問われた時代でもあった。ヤルン・カン遠征については、巨額の募金をした大きな隊で、現地のシェルパを使って、極地法で登るという登山がもはや時代遅れにみえはじめたころである。また、リーダーシップを終えたばかりの高木と松沢がヤルン・カン遠征で抜けて、積雪期の山に向かうことになった。海外遠征計画の並列に象徴されるように山岳部は大きく揺れていたといえるだろう。七三年一月二九日、出水リーダーによる春山検討拒否ならびにリーダー辞任の弁があった。二月五日に、「ルーム改革案」が三回生一同からだされ、ルームの検討体制はリーダーシップ制から議長団制になった。山行を山岳部水曜会で検討はするが決定はしない。個々の判断に委ねられた。こうした激動とほぼ同時進行で、ヤルン・カン隊は一月二四日に先発隊出発。井上と甲斐はカルカッタへ船荷を受けとりに、森本と高木はカトマンズへ。二月四日に松沢が出発しニューデリー経由カトマンズで空輸の荷物を受け取った。こうして春にはヤルン・カン遠征で高木と松沢がぬけ、山岸・片山らの五回生と中尾らの四回生の一部が山岳部を卒業していった。部員構成が変わり、山行の検討体制も変わったのである。

## 二、七三年のヤルン・カンの初登頂と遭難

ヤルン・カンの記録としては、和文のものとして、隊の公式報告書①、学術報告書②、登頂した上田の手記③、物故した松田・樋口・田附・井上の追悼集がある④⑤⑥⑦。

ヤルン・カン隊の構成は大きく分けて三つだった。第一は、隊長・登山隊長をはじめとした年長者と医師。つまり西堀、樋口、斎藤惇生（四三）、田附重夫（三八）。登山隊長の樋口明生（四三）は、山岳部の一九六四年のガネッシュ（アンナプルナ南峰）を初登頂に導いた。第二は、ヒマラヤ等の遠征経験をもつもの。つまり登山隊の中核となる三〇歳前後の、富田幸次郎（三三、インドラサン登頂）、吉野熙道（三二、ガネッシュ登頂）、松田隆雄（三一、ヤルン・カン偵察）、神山義明（三〇、七〇年の日本山岳会エベレスト隊員）、上田豊（二九、ガネッシュ登頂）、井上治郎（二七、七〇年の日本山岳会エベレスト隊員、六七年度つまり六七年秋からの山岳部リーダー）。そして第三は、まだ遠征経験のない若手である。将来の遠征の担い手として選ばれた。浅野潔（二八、六六年度山岳部リーダー）、甲斐邦男（二五、七〇年度山岳部リーダー）、森本陸世（二四、七一年度山岳部リーダー）、高木真一（二三、七二年度山岳部リーダー）、松沢（七二年度山岳部サブリーダー）。若手とはいえ各回生のリーダーやサブリーダーの経験者である。その時点でいえば、京大学士山岳会・京大山岳部の総力をあげて送り出せる最も強力なパーティーだったといえるだろう。連絡将校・シェルパ・ローカルポーター・キッチンボーイまで含めてネパール人の支援が三〇名だった。

二月二〇日、ダランバザールからキャラバ

アタック態勢に入る前、ＢＣでくつろぐメンバー

ンを開始した。三五三個の荷物が人の背にのって運ばれていく。三月五日ヤンポディン到着。三月二七日ベースキャンプを五二一〇メートルに建設。四五個の荷物が着いた。すぐ登攀を開始した。Ｃ１、Ｃ２、Ｃ３、Ｃ４、Ｃ５を順次設営した。四月九日、シェルパのミンマ・ノルが肺炎にかかり、一一日に担架にのせてＣ２からＢＣまでおろした。

ヤルン・カンは難しかった。第五キャンプを七九五〇メートルに設営し、第六キャンプはあきらめた。予定より一段低いその場所を最終キャンプとして登頂をめざすことになった。五月一四日午前六時半出発。松田・上田のパーティーを、吉野・浅野・カルマの三人が支援した。松田と上田が午後六時に初登頂した。しかし下降中にルートを見失い、登りに置いておいた酸素ボンベのありか「デポ地」（八一四〇メートル）が見つからない。ビバークしたがツエルトを風で飛ばされ、あきらめて歩き続けた。午前三時、明るくなるのを待つ。午前五時、夜が明けてまた歩き出す。松田がザックを落とす。八〇〇〇メートルを超える高所で、無酸素で一晩を過ごしたことになる。

五月一五日の朝、松田と上田が苦闘しているようすを、第五キャンプの吉野・浅野・カルマ、第四キャンプの富田・甲斐・森本・高木・松沢、そしてベースキャンプからも午前六時一〇分から視認できた。上田が動いているのが見える。二人ははぐれた。甲斐と森本とニマがＣ４を出発しＣ５を通過して救援に向かった。上田と出会えた。松田のほうは折れたピッケルのシャフトだけがみつかった。転落したと考えられる。翌一六日再度、Ｃ５から富田と高木が松田の捜索にあがった。同じ回生の高木が八〇〇〇メートルを超えて救援に向かうとき、わたしは七四四〇メートルの第四キャンプを守る役割になった。眼の前に展開する遭難と救援を見守るほかに術が無かった。以後の隊の行動の詳細は前掲書に譲る。

## 三、七三年の北俣と槍の遭難

ヤルン・カンのあと、高木とわたしは、樋口らの勧めもあって出発前に予定した通りネパールからパキスタンにまわってカラコルムの未踏峰の偵察に向かった。西カラコルムのフンザの奥にあるシスパーレ（別名パス、七六一九ｍ）。バツーラ山群の未踏峰である。自分たちが見つけた山を、自分たちで偵察し、自分たちの力で登りたい。高度計で五四四〇ｍまで試登して戻った⑧。

高揚した気持ちで八月に日本に帰ってきたら、待っていたのは粟屋文雄の訃報だった。北アルプスの北俣谷で、急斜面の高巻き中に転落して死亡した⑨。入山初日のことだった。また本来は四・三・二回生の三人で計画されていたが、剱岳夏合宿中に三回生が雪渓崩落の事故で負傷し、それを急きょ欠いたままでの二人だけの入山だった。

戦後の京大山岳部の歴史でいえば、金比羅での岩登り中の転落死、残雪の鹿島槍ケ岳での転落死、そして六二年一一月の穂高滝谷のトラバースで加納洋（当時二回生）が滑落死、六七年三月の日高の雪庇踏み抜きによる高山晴彦（当時二回生）、それ以来の遭難ということになる。一九六七年三月一八日、一一時二五分、日高山脈の中の岳とペテガリ岳のあいだの稜線で雪庇の崩落とともに高山が転落。雪崩に巻き込まれて行方不明。セカンドを歩いていたステップから右へ三〇センチのところから雪庇が崩落。バランスを崩して落下。一転してストップ体制のまま、雪庇崩落による雪崩に吸い込まれていった⑩。すぐ捜索したが手袋とピッケルを発見したのみ。八月二七日、ようやく遺体を発見した。

当時の京大山岳部には「四年周期の二回生遭難説」があった。遭難は四年に一度、遭難するのは二回生、という意味である。高木と

わたしが、その四年周期の回生にあたる。われわれ自身は二回生のときを無事にすごしたが、五回生のときに、下の二回生が遭難したことになる。

粟屋文雄、享年二〇歳。そこで立ち止まるべきだった。だが、京大山岳部としては停まらなかった。七三年一〇月、カラコルムの登山計画が再始動した。カラコルムの偵察から帰ってきた高木・松沢と、北俣谷の遭難でうちひしがれている現役の山岳部員のあいだに温度差があったのだと思う。第一候補シスパーレ、第二候補K12、第三候補ルプガールサール（七一九九m）という計画を立てた。

一一月二〇日、隊長の岩坪五郎が東京の駐日パキスタン大使館に申請書を出した。その同じ日の未明に、槍ヶ岳の雪崩遭難があった。槍平から槍ヶ岳に向かう途中、風雪のなかで設営したテント地が雪崩に襲われて四張とも埋没した。わたしは槍の遭難パーティーの最上級生だった。北俣の遭難のあと、おずおずと最初の一歩を踏み出す山岳部にあって、一一月は二班に分けて合宿形式での訓練を意図した。二回生のアイゼン合宿を立山でおこない高木が責任をもつ。一回生のアイゼン合宿を槍ヶ岳でおこない松沢が責任をもつ。そうであるはずのものだった。

一一月としてはまれにみる豪雪の年だった。一八日に穂高平より槍ケ岳を目ざして蒲田川右俣ぞいに進んだ。槍平にテントを張った。翌一九日は槍の肩をめざして胸近いラッセルの中を進んだ。午後一時四〇分、大喰岳西稜末端部へ向かう途中、通称「中の沢」の末端部、標高二一〇〇メートル地点で行動を打ち切って、テントを設営した。一一月二〇日午前〇時三五分。就寝中に雪崩に遭遇し、四つのテントに分散していた二二名全員が、テントごと雪面下約一メートルに埋没した。テントをナイフで切り裂いて脱出を図り、順次救出したが、成田幸裕（二一）、太田勝啓（二二）、佐伯邦夫（二二）、道倉洋一郎（二〇）、佐伯秀夫（一八）の五君は帰らぬ人となった⑪。各テントで一ないし二名が亡くなった。北俣そして槍と、わずか三か月のあいだに二つの遭難があって、親しい仲間が六人亡くなった。山岳部はそれを受け止めるのにせいいっぱいだったと思う。

## 四、七四年のK12の初登頂と遭難

明けて七四年四月一五日にK12の許可が来た。高木をはじめ登山隊は行くという。申請当初の計画と比べて弱体化した構成だった。登山隊は五名。隊長・岩坪五郎（四〇）、金山清一（三一）、高木真一（二四）六回生、伊藤勤（二四）五回生、奥哲（二〇）三回生。強い隊とはいえない。個人の力量は横においても、OBと六・五・三回生というメンバー構成は国内の積雪期山行程度のものである。ほかに学術班として能田成（三三）の参加が決まった。形式上、二度の遭難を経たばかりの京大山岳部の登山隊である。

そうした準備の矢先、五月三日、ヤルン・カン帰りの三人の隊員が奥美濃の山にいわな釣りにいく途中、自動車ごと谷間に転落した。富田と浅野が亡くなった。

K12準備期間は一か月あまり。五月末に医学班ができた。六月一四日に先発隊の高木が日本を出発し、七月二日に本隊が出た。七月一五日カプルからキャラバン開始。登山報告⑫をもとに登頂と遭難の時系列を記録する。

八月二九日、C3からあがって六七〇〇メートルにC4を設営した。予定より三〇〇メートル低い。アタック隊の高木と伊藤が残り、支援隊の金山と奥とイスマイリはC3にくだった。

八月三〇日、六時前に高木と伊藤はC4を出て登頂行動を開始した。午後五時四〇分「ただいま頂上にいます」という高木の交信があった。初登頂した。

午後六時、頂上での儀式はすべて完了してくだり始めた。午後七時四〇分、シアチェン氷河よりの岩陰でビバーク。簡易テントと非常食をもっていた。

八月三一日、朝六時、「風強く、視界まったくきかず動けない」「目は見える。凍傷にもやられていない。昨夜はわりあい眠った。固形燃料で生ぬるい水を作って飲んだ」。

午後一二時「雪洞を拡げて、いごこちがよくなった」つまり、風雪のため行動できず、七〇〇〇メートル越えで二晩めのビバークとなった。C3の金山隊も降雪と強風で動けず。

九月一日、午前六時、高木と伊藤は行動を開始。C3の金山隊は視界不良と強風で動けない。さらに一二時、二時、と下降中の経過報告の交信があり、午後四時に、トラバース中に伊藤のアイゼンが靴ごと脱げた。靴下を重ねて歩いているとの報告。午後六時すぎの

交信で、スリップしてアイスハーケンにぶらさがっていると報告があった。そのあとの交信は途絶した。

登頂と遭難をひとつのパターンとしてとらえてみるとヤルン・カンとK12はよく似ている。登頂後のビバークになった。二人の登頂者のうちの一人に疲労が蓄積した。頂上アタックの隊員を最終キャンプから支援する体制と、それを整える力量がなかった。

七三年五月一四日のヤルン・カン登頂から、一九七四年九月一日のK12登頂後の遭難まで、わずか一年四か月のあいだに、二つの初登頂と四つの遭難があった。五月に一人、八月に一人、一一月に五人、九月に二人。奥美濃での自動車の転落事故の二名を加えると、一一名が亡くなったことになる。

## 五、八〇年の剱岳赤谷尾根の遭難から九一年梅里雪山の遭難まで

二つの登頂と四つの遭難、それから四〇年が経過した。山岳部の『報告』一六号としてまとめられている期間⑬のその後のことをかんたんに書き添えておく。まったく無縁とはいえないかたちで、似たような遭難が繰り返されたからである。

八〇年一二月三一日、午後二時二〇分、剱岳の赤谷尾根を下山中の京大山岳部の五人パーティーが、一五五〇メートル地点で、雪庇を踏み抜いた。雪庇の崩落とともに三人が転落し、竹村義文（二六）、伊藤健一郎（二三）が、白萩川側に滑落して雪崩に埋まった⑭。一報をきいて、わたしはすぐに第一次救援隊として馬場島に一月一日にかけつけた。一月二日に伊藤のザックを発見。悪天のため、一月六日に捜索を打ち切った。昭和五六（一九八一）年で「五六豪雪」と呼ばれ、山は連日の猛吹雪となり、死者一〇名、行方不明一六名だった。「海外の山の初登頂後の遭難」というパターンで、ヤルン・カンと同じようにK12で遭難があった。「日本の山で豪雪が降ると遭難」というパターンで、槍と同じように剱岳で繰り返された。さかのぼって日高の雪庇踏み抜きと剱岳のそれもよく似ている。

槍から剱岳までの二つの遭難のあいだ、つまり七四年から八〇年までの山岳部の事故一覧表がある⑭。それをみると二二件の事故があった。岩登りをしていて転落、雪面を滑落、雪崩遭遇、雪庇の踏み抜き、ブロック雪崩、沢登りで水中へ転落。さまざまなパターンで、いずれも死にまでは到らなかった。七九年、八〇年とその事故のペースは加速していた。

AACKは一九八二年四月二一日、カンペンチン（七二八一m）初登頂。八四年に、わたしはもう一度カンチェンジュンガに行った。日本山岳会のカンチェンジュンガ縦走である⑮。ヤルン・カンでの経験を買われての参加だった。主峰隊のリーダーを務めた。八四年五月一八日から二〇日にかけて、重広恒夫・和田城志・三谷統一郎の三名が、南峰から登り中央峰をへて主峰まで頂上稜線を縦走した。わたしは当時三三歳、ちょうどヤルン・カンの富田の年齢になっていた。八二五〇メートルの最終キャンプまでのルート工作を担当した。明治大学の山本宗彦（当時二四）がパートナーだった。山本は四年後の八八年にチョモランマの北陵からの登頂者になった。八〇〇〇メートルの上と下を無酸素でルート工作し、荷揚げし、八二五〇メートルの最終キャンプでも無酸素で寝た。七〇〇〇メートルの寝苦しさと八〇〇〇メートルのそれはまったく違う。ヤルン・カンで松田と上田の二人が経験した世界がどれだけ過酷なものかを身をもって思い知った。

高度のほかに強く実感できたことがある。個々の隊員の力量が高い隊だった。縦走隊の三名や主峰の頂上まで固定ロープを伸ばした尾崎隆など、当時の日本を代表する一線のクライマーの登山の技術とスピードを見た。隊長の鹿野勝彦がたてた登山タクティクスも優れていた。主峰の頂上まで固定ロープを張って縦走隊の下降の安全を確保した。主峰から西峰までの縦走ができる余裕がないと判断し、主峰で下山を指示したのも正しい。この隊の中核は日本山岳会の一九七六年日印合同ナンダ・デヴィ縦走隊だ（当時の会長は今西錦司）。鹿野と重広のほかに高見和成や加藤保男など社会人山岳会で活躍していた当時の国内一流の登山家で構成されていた。その七八〇〇mを超える主峰―東峰の縦走経験を活かして着実にカンチェンジュンガの八五〇〇mの頂を縦走した。個の力を高める、対象と力量をみきわめる、個人と隊の目標を明確にする。山登りの基本を改めて学んだと思う。

一九八五年、山岳部はマサコン初登頂⑯、同年AACKのナムナニ初登頂。わたし自身は二回のカンチェンジュンガでの経験を踏ま

えて、自分なりのヒマラヤ登山を構想した。八九年にムズターグアタ（七五四六m）に登った⑰。ＡＡＣＫとしては史上初の既登峰への遠征である。すでに登られている山でよい。自分たちの力だけで登れる山を探して全員登頂し、翌年の八〇〇〇m峰への準備とした。九〇年にシシャパンマ（八〇二七m）の頂上に無酸素で到達した。頂上までを固定ロープにし、ほぼ全員となる二三人の登頂を果たした⑱。八九年と九〇年の二つの登山は、松林・瀬戸・出水ら一年下の回生となる親友たちがいて、さらに下の回生の人々が支えてくれて成り立ったものだと痛感する。

そのシシャパンマ計画が進行中に、雲南の梅里雪山への遠征計画が始動した。振り返ればちょうど日本経済はバブルの時期で巨額の募金が可能だった。シシャパンマ登頂の半年後、九一年一月三日、梅里雪山（六七四〇m）のＣ３（五一〇〇m）で雪崩遭難があり、日中の隊員一七名全員が死亡した。結果として明白だが、雪崩に埋まる場所にテントを張った。テント設営地を誤ったという点で、槍の遭難と梅里雪山の遭難は重なっている。一九七三年ヤルン・カンに始まった狂騒が、一九九一年一月三日に終焉したといえる。六回の遭難で三〇名の若者が山に逝った。

## 六、京大の山登りの創立百周年として

「ひとつの事件があったということと、その渦中に生きてこれを知るということは、ぜんぜん別のものだ。自分の経験した事件を生きたといえる人は決して多くはない。いや、その意味でならば、そこに死んだといえる人もけっして多くはないだろう。多くの人はただ鉄槌を受けて感覚が麻痺しただけだ。それからあとの彼らの生涯は、その痛みを検討もせぬままに、ひたすらなかったものとして、あいまいな、一種の薄明のなかにすごされてゆく・・・・・・（Ｊ．ボルドウィン）」

これは、松田の追悼文集④に寄せた拙文「ランプさんのことなど」の冒頭の引用である。その文章に続いて、松田との思い出が語られ、こう締めくくられている。

「しかし今、僕ははっきりと予感する。身近に多くの死に囲まれながらも、僕は着実に彼らの死を腐食してゆくだろう。たしかに時の流れこそ万能であり、日々生きてゆくことは、すなわち、彼らの死を過去へ過去へと切り捨ててゆくことに他ならない。何事もなしえぬままに、年とともに僕はしだいしだいに、もっともっと醜悪になってゆき、はるか遠くを見るような眼差しで彼らのことを思うのだろう」。一九七五年一〇月とある。二四歳のときの文章だ。実際に歳月をたどると、そのとおりに鉄槌で麻痺した人生を送った。

「山で人が死ぬと追悼集ができる。なんだかそれがあたりまえのことのように思っている人がいて気持ちがよくなかった」。梅里雪山でなくなった工藤俊二の追悼集⑲のあとがきにみつけた一節である。幸い、梅里雪山のあと大がかりな海外遠征は幕を閉じた。したがってヤルン・カンやＫ12のような遭難はない。山岳部のほうも部員が激減した。かつてのような山行はしていない。一九八〇年の剱岳以来、これで三〇年以上も遭難がない

高木がＫ12で亡くなって下宿の遺品を整理していたときだ。ブータンの未踏の最高峰ガンケルプンツムの山容の自筆模写が壁に掲げられていた。もし無事に帰ってきていたら、さらなる高みへと夢を追っていたのだと思う。ブータンは、いっとき登山を解禁したが、いまは禁じている。麓で暮らす人々にとって、山は登るものではない。山はあがめるものだ。信仰の対象である頂を足で踏むということはもはや許されないだろう。

歴史をひもとくと、一九一三年に三高山岳会が設立された⑳。一四ないし一五年ころ京大旅行部設立、二三年に三高山岳部設立。三一年に学士山岳会設立と続く。いってみれば、京大の山登りは今年で「創立百年」を迎えたことになる。

現在ＡＡＣＫの会長を務めている松林公蔵は、彼の参加した一連のヒマラヤ登山をすべて無事に終えた。そして「フィールド医学」という新しい旗のもとに、学術と登山とを結び付けるしごとをしている。その顰にならって、二〇一〇年に彼とともに「京都大学ブータン友好プログラム」というのを立ち上げた。頂を踏むことだけではない山とのかかわりを模索している。この二年半で、一一隊七一名の京大の教職員学生をブータンに送った。一名はこれでまる二年現地にいる。逆に三隊一五名のブータン人を受け入れた。

二〇一三年五月、王立大学との連携協定のために三度目のブータンに行った。機体がブータンのパロ空港に近づくころ、左手にカ

ンチェンジュンガがくっきり見える。雲海を突き抜けて白く輝く山塊だ。頂上付近は風が強いのだろう。雪煙がたなびいていた。あらためて気がつくのだが、カンチェンジュンガはいつでもそこにある。八六〇〇メートルの山頂は高すぎて雲がかからない。

**引用文献**


①京都大学学士山岳会編、『ヤルンカン』、朝日新聞社。一九七五年一二月一〇日発行。
②京都大学学士山岳会、『ヤルン・カン　学術調査報告―京都大学学士山岳会ヤルン・カン遠征隊一九七三』、一九七五年一一月一五日発行。
③上田豊、『残照のヤルン・カン』、中公新書、中央公論社、一九七九年八月二八日発行。
④井川勲・木村雅昭・栗田靖之編、『追悼　ヤルンカンに逝く』一九七六年三月二〇日発行。
⑤樋口明生追悼文集刊行委員会、『樋口明生君の想い出　海を探り山に遊ぶ』、一九八四年七月二二日発行。
⑥追悼田附重夫出版会『追悼　田附重夫』、一九九一年七月三〇日発行。
⑦井上治郎遺稿・追悼文集刊行委員会、『追悼　井上治郎』一九九三年二月二三日発行。
⑧松沢哲郎・高木真一、『岩と雪』三四号、「解禁後のフンザに入る」。一九七四年発行。
⑨京都大学山岳部、『追悼　粟屋文雄』一九七四年発行。
⑩山本清司・吉越亘・芝田正樹編、『逝友』、一九六八年九月一〇日発行。
⑪京都大学山岳部、『一九七三年一一月　槍ヶ岳遭難報告・追悼』、一九七五年一〇月二一日発行。
⑫岩坪五郎編、『K12遠征記』中央公論社、一九七六年九月三〇日発行。
⑬京都大学山岳部、『報告一六号』、一九八六年一一月一日発行。
⑭京都大学山岳部、『一九八〇年一二月　剱岳遭難報告・追悼』、一九八三年一〇月一日発行。
⑮日本山岳会カンチェンジュンガ登山隊編、『カンチェンジュンガ縦走』、茗溪堂、一九八六年発行。
⑯京都大学山岳部、『報告一七号　一九八三―八五　ブータン・ヒマラヤ特集』、一九九四年一〇月三〇日発行。
⑰京都大学ヒマラヤ研究会、『ヒマラヤ学誌』一号、一九九〇年三月一〇日発行。
⑱京都大学ヒマラヤ研究会、『ヒマラヤ学誌』二号、一九九一年五月二一日発行。
⑲工藤俊二追悼集編集部、『工藤俊二　彼があるいたこと』、一九九三年五月五日発行。
⑳今西錦司編、『ヒマラヤへの道―京都大学学士山岳会の五〇年』、中央公論社、一九八八年発行。


## ヤルン・カンスケッチ　一九七三


吉野熙道

京都大学学士山岳会（ＡＡＣＫ）は


一九七三年にネパール・ヒマラヤのカンチェンジュンガ山群にあるYalung Kang（別名Kanchenjunga West Peak、八五〇五ｍ、当時世界最高の未踏峰）に遠征隊を送り、五月一四日に松田隆雄（ランプ）、上田豊（ポッポ）の両名が初登頂に成功した。しかし彼らは頂上からの下山時にビヴァーク用のツエルト・ザックを吹き飛ばされ、さらに酸素ボンベのデポ地（八一四〇ｍ）にたどりつけないまま、酸素不足から視力を失い登頂ルートのトレースから外れてしまった。

私はサポート隊員として、浅野潔（パンネ）、サーダーのKarma Sherpaと共にＣＶを出発したが、すぐに浅野の酸素ボンベがリークして空になってしまい、三人分の荷物を二人で持って登り、デポ地でアタック隊に新しいボンベや紅茶を渡してから、彼らの帰路のためにルート工作をしながら下って、夜九時過ぎにＣＶ（七九五〇ｍ）に帰着した。

翌日デポ地より上方の小雪面の右に二人の姿を認めた。松田は座り込んで、上田が付近を動いていた。ちょっと目を離した後、松田は見えなくなっていて、上田は左手の雪面をウロウロしていた。快晴で、彼らとは手が届きそうな距離だった。前の晩登頂前から二人との無線交信ができなくなっていたので、必死に声をからして叫び続けたが、彼らには聞こえていないらしく、なんの反応もなかった。私は彼らが遭難したものと判断して、ＢＣの樋口明生（ジャン）登攀隊長に「すぐ救援に上がりたい」と伝えたが、「酸素もなしに疲れているお前達が行ったら、二重遭難になる。

下のキャンプから救援隊を上げるから待て」と言われ、一刻を争うのに、と悔しがって粘ったが、どうにもできなかった。

結局、上田は暗くなってから、第一次救援隊の甲斐邦男、森本陸世（グロン）と合流できて、一六日未明にCVに収容された。上田は三日も八二〇〇m以上の高所にいたことになる。救援隊は松田の折れたピッケルシャフトと上田が落としたザックを回収していたが、松田は発見できなかった。続いて第二次救援に富田幸次郎、高木真一が上がったが、松田の手がかりは得られず、酸素も隊員の余力も尽きて、捜索は断念せざるを得なかった。

上田はBCで斎藤惇生ドクターに凍傷の応急処置を受け、ネパール軍のヘリコプターでカトマンズに搬送された。六月一日に帰国して手術を受け、両足指すべてと右手四本の指の一部を失った。その後、南極・ヒマラヤの氷河調査に活躍するまでに回復した。

八月一一日には京都で、松田の葬儀がとりおこなわれた。AACK内部では、遭難に対する厳しい調査と検討がなされた。悪条件続きによる酸素ボンベの予想以上の消耗が痛かったし、無線機の不通は我々に直接的なダメージを与えた。上田のザックから回収された無線機は、ハンダづけが一カ所破損していた。登頂以前にすでに通じなくなっていたことから見て、落下による衝撃によるより前に不良となっていたか、破損していた可能性が高いと思われたが、詳細は不明である。

私は若手隊員の中では唯一人関西圏在住でなく、募金その他の準備に割ける時間が少なかったので、日本出発前から、「その分、報告書の編集はわしがやる」と宣言していた。

ところが、遠征の翌年には、富田・浅野が美濃の山で車の転落により死亡、さらにはカラコルムのK12峰初登頂後に、高木が頂上から下山中転落死亡という事態が起こった。報告書の原稿も完全ではない時期であり、大変苦労したがなんとか出版し、追って学術報告書も編集・出版した。そしてその後、一切の登山をやめた。思えば山岳部に入ってから、現役六年間毎年平均一八六日間も山にいた。ヤルン・カンまで一三年、かなり激しい登攀を続けてきていた。すでに一児の父であり、大学での研究業績も挙げねばならない時期であった。好き勝手に登山を楽しむゆとりもなく、何よりも、これ以上続けたらおれも死ぬな、と漠然と思うようになっていた。

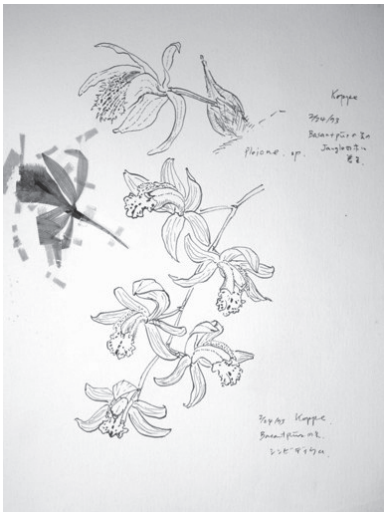
先日、一九六九年から一九七〇年にかけてブータン王国に滞在した際のスケッチをAACKホームページに掲載させてもらったが、ついでにヤルン・カンのスケッチも整理したので、この際、これも投稿させてもらうことにした次第である。なお、これらのうちの一部は前述の上田著「残照のヤルン・カン」にもカットとして採用されたものである。

なおスケッチのほとんどは、ヤルンの谷に入った荷物の集積基地であるTseram（三八〇〇m）、Ramser（四四七〇m）、ヤルン氷河内のBC（五二一〇m）周辺、CⅡ（六四七〇m）で描かれ、キャラバン中は往路でわずか五枚、帰路のGhunsaで二枚のみである。キャラバンは往路では一五人の隊員、三〇人のシェルパ、五〇〇人以上のポーター、現地購入食料を除いたすべてで三〇トンを超す荷物、という空前の大部隊であった。隊列は前後数キロの長さにわたった。隊員は個人装備のみの軽装でごく短時間で一日の行程を済ませてしまえるので、時間のゆとりはたっぷりとあった。そのわりにスケッチが少なかったのは、私がインド国境のBiratnagarからヤルンの谷に入るまで、専門とするサトイモ科の野生・栽培植物、麦、蕎麦、雑穀などの種子の調査・採集・記録に集中していたからである。帰路のキャラバンでもそれを続けたが、遭難後でもあり荷物の少ない早足の旅で、スケッチに割く時間もなく、それ以上にそんな気持になれなかったからである。

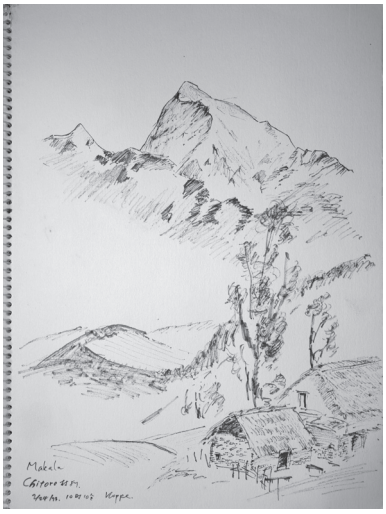
私は改めてスケッチを見て、私たちがヤルンの谷のいかにすばらしい世界に青春の貴重な一時を過ごしていたか、今更ながら感慨にふけった。私のつたない技ではとうてい表現不可能な、荘厳で美しい世界だった。

思えば、ランプだけがひとりで三八年間もヤルン・カンの高みからこの氷雪の世界を見つめてきたのだ。さびしかっただろうか。今となっては、以て瞑すべしである。ここに改めて彼の冥福を祈る。

編集者注：本稿はAACKホームページ（http://www.aack.or.jp/）より転載しました。掲載スケッチも誌面の都合で一部割愛しました。



Orchid 1973 02 24



Makalu from Chitre 1973 02 24

Peaks of Kanchenjunga from Backside Slope of Tseram 4,550m 1973 03 14

Camp Site near Chiso Pani 2,160m 1973 02 26

South Face & West Ridge of Yalung Kang from Upper Ramser 4,550m 1973 03 17

Upper View of Yalung Valley, near Tseram 3,700m 1973 03 15

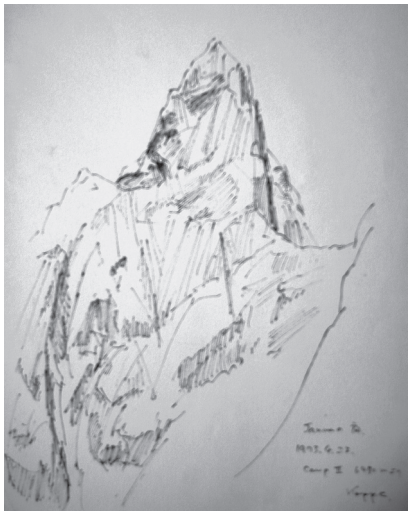
Talung Peak from BC 5,210m 1973 03 30

Searching Climbing Route from Upper Ramser 4,550m 1973 03 17,18,19

West Ridge of Yalung Kang from BC 5,210m 1973 04 18

East Shoulder of Jannu (7,710m) from BC 5,210m 1973 04 02

Ghunsa Village (3,280m) -1 on the Return Caravan from Yalung Kang 1973 05 28



East Shoulder of Jannu from CII 6,470m 1973 04 23

# オッポンダーンの道
## （ヤルン・カン目指して）

新井　浩

二〇〇二年、古希を迎えたＡＡＣＫの有志四人は、「西堀栄三郎生誕一〇〇周年」の行事が「探検の殿堂」で行われ、西堀先生が同じ古希の年齢で総隊長としてヤルン・カンに行かれたことに意識して、この山へのトレッキングが決定した。以下、当時のことを思い出して、紀行文を作成したが、一〇年前のことで、覚束ない内容であるが、ご容赦願いたい。

カトマンズから東ネパールのタプレジュン空港へ飛び、トレッキングは始まる。往き前半の四日間は、山村通過の道であった。傾斜のきつい山腹は、見事な棚田であった。底の見えない谷から一気に山上近くまで、しかも対岸の山腹も同様に耕されており、この雄大な風景に驚かされる。道は、農家の軒先をかすめ庭を横切り、枝豆のあるあぜ道を踏み、竹編み牛舎の側や、共同水道場など、村の生活を垣間見るといった具合であった。我々の姿を見つけて子供達が飛び出してくる。「ナマステ!!」と可愛いい手を合わせる。「ナマステ坊やの声だ」と微笑むのであった。

山の地形は複雑で、谷があれば道はダウンし、登り返して行く。尾根があれば、乗り越えてゆく。アップダウンの激しい道であるが、結構人の往来がある。要所要所にチョータレがある。歩く民族であるネパール人の生活の知恵で、石造りのベンチである。木陰にあったり、谷間の風のある所だったりする。ときに背もたれ部分に村人の名前が太陽・月・象・魚等と共に刻まれている。チョータレは、歩く人にとって温かい優しい休み場所なのである。すっかり感心してしまった。

一〇月五日　晴　最奥の村ヤンプティンに向けての半日行程である。

一一時半、ヤンプディン着。一七〇〇m/h。一四〇軒、一〇〇〇人ぐらい。学校・雑貨店・ロッジあり。川傍の広いテント地は気持ちがよろしい。西堀隊と同一場所であった。

現地ポーター四人解雇。午後は水道があり、洗濯に励む。木陰で休息する。夜にホタルが一匹、テントに飛び込んできた。

一〇月六日

最奥の村をあとにして、往き後半の四日間は完全に山道である。道は、山奥のカルカへ通う遊牧の道であった。デュピイ峠二六一〇m/hを越え、オムジェ・コーラに達し、更にはラミテ峠三三一〇m/hを登り、シンブワ・コーラに降り立った。驚いたのは、尾根道が石畳で出来ていたことだった。村人が営々として築いたに相違ない。川喜田二郎先生は、「道路を大事にする文化がよく発達している」と述べておられたが、ヒマラヤ全体に及ぶ足による交通路であるネパール国道には目を見張ったのである。

ラミテ峠は難関という。北側はなるほど巨大な険悪なガレ場となっていて、一気に七～八〇〇mも下のシンブワ・コーラに崩落している。ガレ幅は年々拡大中とのこと。放置されている。折悪しく小雨がばらついて来た。雨具・スベラーヌをつけてガレ場のトラバースにとりかかる。大岩・小岩がゴロゴロしている砂の斜面を下を見ないように、スリルいっぱいの横断だった。

シンブワ・コーラを遡り、木製の橋を渡るとトロンタンのキャンプ地だった。ここはジトジト・ジメジメの環境だった。

一〇月八日　薄曇り。シンブワ・コーラを遡る一日となるはず。

七：一五にスタート。岩小屋の前を通り、右岸の山腹道は樹林の下縁をたどる。天気は悪くガスのため、見通しは悪い。左先に大きな屏風岩がチラリと見える。空が広がってくるようだ。大木のシャクナゲ林をすぎると、やや平坦な場所にブルーベリーを採る母娘の二人に会う。色鮮やかな前掛けに目をうばわれた。

九時半、三一四〇m/h。河岸段丘の上に一四～一五頭の牛・洋犬・ブルーシートテント。一〇時半、ワータ通過。一一時半、へび岩の祈祷所、三三八〇m/h。一二時半、お茶の出迎え、ビスケットをかじる。一三時二〇分、ツェラムに到着、三八五〇m/h。疲れと空腹で、やっとこさであった。

ロッジが二軒。その一軒は石を載せた屋根で、「カンチェンジュンガ・ツェラム・ホテル」とあったので笑ってしまった。ヘリポートもある広い芝地である。ここは西堀総隊長が

一ヶ月も滞在したところである。本隊の登山中、ソーラーパネルをつかい、ハム無線を行っていた。この辺りが森林限界である。背後は急峻な山地で、上部の岩小屋ではポーターのたき火・煙があった。相変わらず展望は利かない。

一〇月九日

頭上が広がって来ても生憎の雲で、高い白い嶺は見えない。朝早起きして、出掛ける体勢をとるが、雪が降り出しステイとなる。再びテントの中に寝袋を拡げ、くつろぐ。ローカルポーターの六名を解雇する。みぞれの中、走り去る姿を見送った。一一時、温かいオレンジジュースが各テントに配送された。コックの心遣いに感謝する。昼食を摂った後、ごろりとなり、まどろんでいたところ、なにやら声がしたので、テントを飛び出すと、上部から降りて来た人たちで、ここツェラムで泊まるという。シドニーからの男女二名とガイド・ポーターの三名であった。「雪の日の下山は、最悪だった。冷たさと足が滑って、難儀した。昨日の朝のカンチェンジュンガは素晴らしかった。」明日は我々の番である。好天を祈ろう。おやつはポップコーンだった。

一〇月一〇日、晴、午後雪となる。

左の山裾と、ヤルン氷河本流の右岸であるモレーン丘との間が広い草地の側谷となっていて、なんともはや気持ちがいい。右のモレーン丘は、高さが一〇mほどで、下流からずうっと上流へ約一〇kmも続いている。従って氷河には未だお目に掛かれていない。ようやく側谷が狭くなるところが、最終のキャンプ地、ラムゼーで、一二時過ぎに着く。標高四五八〇m。石室があってチベット犬が二頭、ヤク三〇頭がたむろしていた。カンチ初登の英国隊の報告にも、この石室のことが記載されている。

一四時、悪天の兆しあるも、上部へ全員で偵察に出掛ける。吹雪いて来たが、一四時四〇分に皆と別れて高野・新井の二人は、シェルパ一人を引き連れて、更に前進する。暗い濃いガスの中、緩い登りのガラガラ道を行く。石積みの古いタルチョを見出す。竹竿とヒモだけの貧弱なもの。一五時半、四六五〇m/h。私は横のモレーン丘を登ってみる。中を覗くと、七～八〇m下にぼんやりと氷河を認める。土砂を被っていて、砂漠のように見える。ところどころ割れ目をみせていたり、蒼い氷がみえたりしていた。振り返ると、黄色ヤッケの高野が心配そうに大岩の陰に座って、こちらを見ていた。急ぎ降りて引き返すことにした。帰りは早い。全身真っ白になって一気にテントにもどる。

食後、明日の行動について話し合う。①天気が悪くとも早朝出発とする。②重いテルモスをシェルパに依頼する。我々は高度に弱いため。③二ピッチ上のタルチョー箇所で、西堀隊の故松田ランプ君の慰霊祭を行う。ボダナートで買い求めて来たルンダ三本を張る。④悪天候でも前進してオクタンまでとする。⑤最悪の場合、ヤルン・カンを見なくて帰ることもある。明日一日だけが勝負。下山日は、一二日とする。⑥二二日がネパール出国のフライト予約済のため、帰路の余裕はない。特にタプレジュン空港での天候如何で、フライト待ちが問題となる。

結果的には、上手に撤退出来、なんと一九日にカトマンズに戻ることが出来た。

それはさて置き、不安一杯の夜であった。私は「明日はきっと晴れる」と断言した。私の高度計付き腕時計には、気圧センサーがあって、その表示を見ると高気圧が張り出し、晴マークとなっていたのである。みんなは半信半擬であった。

一〇月一一日

寒い一夜が明けると、対岸の目前にあるラトン峰六六八二mが黒々と屹立している。素晴らしい青空ではないか。トレッキングの最後になり、やっと神は我々に幸運をもたらしてくれたのである。真っ白の霜を踏みしめ勇躍出発。日陰の谷間は暗くて寒い。途中、モレーン丘を駆け上るブルーシープの一群を見つける。谷は左折する。舞台の幕が開いたかのように突然カンチの白い峰峰が姿を現す。嬉しさが込み上げて来た。最初のビューポイントだった。昨日の降雪の中での偵察で見出した古いタルチョーの場所だった。法事が始まる。シェルパの手で、大きなケルンが出来て、五色のタルチョー（ルンダ）が三方に張られた。風にはためき、祈りの声となる。ローソク・線香・花束は高野さんが持参した。井上さんは西堀隊長のふるさと・湖東町の町旗を、新井はＡＡＣＫの旗を取り出した。お供

えをして般若心経を唱え、冥福を祈った。帰国後、かってのヤルン・カン遠征隊隊員から御礼のメールがよせられた。これは望外の喜びであった。

更に前進して行く。オクタンというタルチョーの立つところ、そこはモレーン丘がなくなり、氷河への降り口となるところであった。四七三〇m/h。ここがカンチェンジュンガ聖山巡拝の地で、最高の見晴し台であった。ヤルン氷河の源頭が見えるビューポイントだった。ヤルン・カンの初登路はすぐ判った。カンチェンジュンガ主峰の英国隊の初登頂ルートも。

早くも雲が湧き出し、今やこれまでと名残を惜しみつつ下山にかかる。いままで前方の山ばかり見ていたが、下流の眺めも結構なものだった。下山途中の我々の建てた新タルチョーでは、お別れに「雪よ、岩よ」を合唱した。色鮮やかな旗は、とても立派であった。下りが平坦になり、コーナーを右に回ると、テントが見えて来た。早い帰還だった。お茶の時間は至福の憩いであった。キッチンテントや石室のシェルパ・ポーター達をねぎらった。

「オッポンダーン」は、途中で出会った老人から、訛りの強い英語で、カンチェンジュンガへの道は、アップ　アンド　ダウンの激しい道だと、身振りで教えてくれた言葉だった。まさしくその通りだった。

帰路は、外国トレッキング隊との出会いだった。グンサ経由のドイツ隊一一名は不調の二名をヘリで帰したとのこと、また、スイス隊八名（女性二名を含む）は、不調の一名をツェラムに残して来たという。ラミテ峠前では、イギリス隊一五名の隊員がバラバラと着いたが、ポーターは一時間も遅れて来た。イス・テーブル持参の大荷物に呆れた。また、もっと下方では、スイス隊一〇名、フランス隊一五名と会う。大勢のポーターを率いる大部隊だった。とにかくヒマラヤの奥地に至る究極のトレッキングとして旅行社が宣伝しているコースだけに、頑健な屈強な外国人ばかりでした。そのなかにあって、わが隊の青野・新井の両夫人の健闘振りには頭が下がるばかりであった。

10月11日　ラムゼーキャンプ地、日の出前の出発記念撮影

今や喜びは、「食物」にありで、ヤンプディンでは、すき焼きに歓声があがった。従来の食事は精進料理みたいもので、肉の味には舌が驚いてしまった。また、ステーキ料理の出現にはしゃいだこともあった。もはや下痢を起こすヤワな胃袋ではなかった。

帰りの山村道では、ネパール最大のお祭りであるダサインに遭遇し、故郷に戻る着飾った人々と擦れ違った。けわしい道を年寄り・子供が歩いてくる風景は感動的であった。

また、帰り道は、おおむねお天気であった。ついに一〇月一八日一〇時半に空港に着く。ロッジの屋根の下に宿泊と決まる。

10月11日　オクタン手前、昼食をとる

コックの最後の腕を振るった食事に大満足であった。食後のビールパーティは、シェルパ・キッチンメンバーが楽しみにしていたようだった。揃ったところで、井上さんは、「この国の挨拶として、ナマステといわれるが、畑の農夫・通りすがりの人など、立ち止まって手をあわせ、ナマステと挨拶される。その敬虔な態度に心打たれた」と、述懐された。ナマステ坊やを忘れ難くおもいだしたりしたのである。

乾杯！乾杯！座は盛り上がって来た。地酒のトンバを貰うと、回し飲みでさらにもりあがった。最後にコック作成の丸いケーキがテーブルに置かれ、HAPPYと書かれていたので、大歓声が上がる。

この夜も、ひとしき雨が降った。フライトは中止かなと瞬間的に思い浮かべ、すぐ寝入ってしまった。

## ヤルン・カン遠望

斎藤清明

ヤルン・カンを、いちどは見ておきたい。カブルー（七三三八メートル）も。

ＡＡＣＫが初登頂した最も高い山と、結成時に登ろうとした山は、ダージリンまで行けば一望できるという。

ダージリンのタイガー・ヒルはカンチェンジュンガ山群の展望でよく知られているが、シッキムはそれよりも北よりにある（つまり、山群に近い）から、もっとよく見えるはず。今年（二〇一三年）二月、入域許可をとってシッキムを訪ね、チベット仏教の聖地でもあるケチェパリ湖まで行ってみた。

現地のブティア人（チベット系）と結婚して住んでいる丹羽晴子さんの案内で、女神の足形をしているという湖に参って、その近くのゲストハウスに泊った。尾根すじに建っていて、まるで山小屋のようだ。晴れていれば、すばらしい展望だろう。だが、あいにく、霧につつまれ、終日ずっと悪天だった。

帰路、ダージリンに向かう途中に晴れ、山なみが朝の光に輝いた。山道を往く乗合ジープから、カンチェンジュンガ山群の峰々が、高く、くっきりと見えた。ただ、ヤルンカンは、カンチの主峰や南峰の後ろがわになっていて、車中からはっきりしなかった。それでも、存在感があった。

ダージリンでは展望のいい宿をとって、夜明けを待った。六時過ぎ、雲が赤く輝きだし、ピークが光った。ほどなく雲が退くと、カンチェンジュンガ山群は予想したよりも高くそびえていた。主峰、南峰とその東面に陽が当たる。ヤルンカンのほうは日陰になっている。それでも、ほの暗い稜線に吸い込まれそうになった。

すぐ左手には、カブルー。まっ白な山容。堂々としている。カンチェンジュンガと一〇〇〇メートル余りもの高度差があるとは見えない。

一九三一年にＡＡＣＫが結成されたとき、翌年のカブルー遠征を計画した。カンチェンジュンガに挑んだ『ヒマラヤに挑戦して』のバウアー隊（ドイツ）も、まず登ろうとしたのが、カンチのすぐ南にあるカブルーだった。おそらく、今西錦司さんらＡＡＣＫ創立メンバーにとって、その本には写真の出ていないカブルーの様子を、あれこれ想像するしかなかったことだろう。

もし、満州事変が勃発せず、カブルー遠征が実現していたらどうだったろう。初登頂できたかもしれない。じっさい、三年後の一九三五年に登られているのだから。

そんなこと考えているうちに、その山容がカンペンチン（七二八一メートル）にも似て

ヤルン・カン（中央）は日陰になり、カンチェンジュンガ主峰と南峰に朝日が当たる。左のカブルーも堂々たるもの。

いるようにおもわれてきた。こちらはチベット高原の独立峰だが、高さもほぼ同じ、ともにゆったりした感じの山である。

カンペンチンに一九八二年に初登頂したAACK隊に加わったから、よく覚えている。しかも、その二五年後に、思いもかけずにカンペンチンに再会しているから。

二〇〇七年夏、カトマンズから車でチベットに向かい、国境のザンムーからニャラムを過ぎ、五〇五〇メートルの峠タン・ラに立った際、シシャパンマの西に、懐かしいカンペンチが目に飛び込んできた。おもわず、「年たけて　また越ゆべしと　おもいきや　命なりけり　さやの中山」（西行）の心境になったものだ。

そんな回想にふけっていたら、ヤルン・カンもカブルーも、また雲に隠れていく。半時間ばかりの遠望だった。

## ヤルン・カン登頂四〇周年記念展

西堀栄三郎生誕一一〇周年とヤルン・カン初登頂四〇周年を記念して、滋賀県東近江市にある西堀栄三郎記念探検の殿堂にて記念展示が開催された。

この企画から立ち上げまでご尽力されたのは、本殿堂の角川（すみかわ）咲江副主幹。彼女は先に開催された西堀栄三郎生誕百年記念展の実行のとき、ちょうどヤルン・カンの初登頂が三〇周年を迎えていることに気付かれ次の生誕一一〇周年記念の時には、必ずヤルン・カンの四〇周年記念展を開催しようと考えられていたそうである。

展示資料については、上田豊隊員が全面的に協力された。氏の保存されている写真や登頂に使われたピッケル、ザックそして遠征の輸送に使用された木箱が展示された。写真やドキュメントは状況を伝える展示に欠くことはできないが、その時実際に使われた道具の展示は、見る人にオーラー発する貴重な展示品である。この三点は上田氏からこの殿堂に寄贈された。

エントランスには吉野熙道のヤルン・カンのスケッチが五点並べられている。そして二〇〇二年ヤルン・カンへの道をたどられた新井浩氏一行のトレッキングの写真や紀行文、地図が展示されて来館者を迎える。第一室には西堀隊長の羽毛服や自筆の原稿やメタル、そして上田氏寄贈のピッケル、ザックが展示され臨場感を煽る。第二室には隊の行動で使われたトランシーバや西堀隊長によってヒマラヤ遠征にはじめて導入された無線の記録。それに隊長がBCにはいるまでの8ミリ映像が流されている。第三室は8千メートルへの登攀の戦いが写真で綴られている。この写真のキャプション始めすべての解説は上田隊員が執筆した『残照のヤルン・カン』の一節からとられている。それだけに、上田隊員が横にいて懐かしい話を聞いている錯覚に襲われる。

記念展のエントランス

展示を見終わって角川副主幹にお願いする。次のヤルン・カン五〇周年の時にはこのような展示会を京大で開催することを希望するので、その時はこの展示を使用させて欲しいと。

## アコンカグア登頂

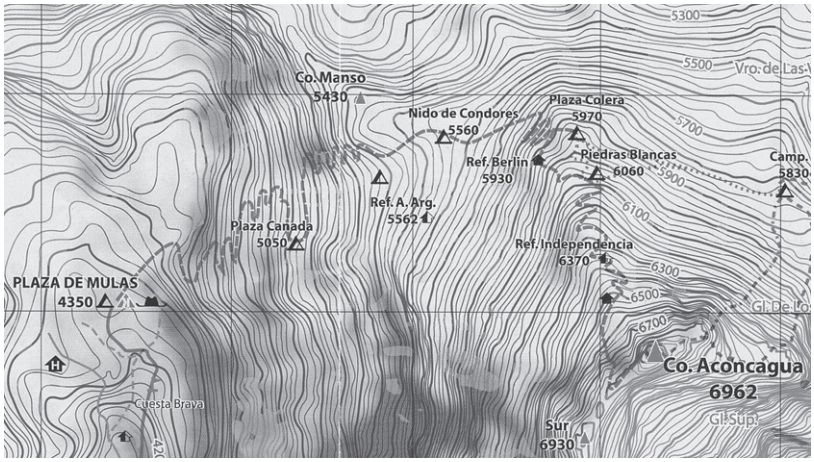
安仁屋政武

### 経緯

二〇一三年一月一九日午後一二時一一分、遂にアコンカグアの頂上（六九六二m）に立った。「遂に」、というのはこれが三度目の挑戦だからである。最初は一九九八年一二月、二度目は二〇一〇年一二月（AACK NL五九号安田参照）、そして今回である。山の神はようやく私に微笑んでくれた。標高五九七〇mのプラーサ・コーレラ（Plaza Colera）を朝六時〇五分に出発して約六時間後、六九六二mの頂に立った。最初に登ろうとしてから足かけ一五年のチャレンジであっ

た。

メンバーは、二〇〇九年のウルムチ騒動で幻となった崑崙の未踏峰（六八五一m）挑戦の時にAACKに入会した遠藤さんと二人である。実は彼とは一九九八年に最初の挑戦を行っている（この時はアメリカ人の若者を加えた三人）。この時はプラーサ・コーレラと同じ所にあるベルリン小屋に泊まる予定でテントをあげなかった。しかし予期に反して、満員（と言われて小屋に入れてももらえなかった）で泊まれず、アタックできなかった。二回目は五五〇〇mで手指に凍傷を負い、下山せざるを得なかった。



アコンカグア地形図（グリッド間隔縦が約1.85km）。主なキャンプ地を示す。これに示されている標高は、頂上を除いて必ずしも正しいとは限らない。

今回は時期を一二月と一月どちらにするかいろいろと思案した。一二月は人があまりいない、登山料が安いというメリットがあるが、天候は安定しない。一月はより暖かく、天候も安定しているが、登山料が高く人も多いというデメリットがある。ということでいろいろ検討した結果、一月にした。結果的にはこれが大成功であった。今シーズンの一二月は、雪は少なかったけれど風が猛烈に強かった（時には一〇〇km/h）。一二月だったら多分登れていなかっただろう。

私は三回目、彼は二回目ということで、秋から用意周到の準備を行った。すなわち九月と一〇月は富士山山頂でキャンプ、その他月一回の山行、綿密な食料計画など、前回の経験を教訓にした。

アコンカグアの一般ルートは岩がない上、標高は高いが氷河や万年雪などがないのでテクニカルな問題よりも高度順応が大きな課題の山である。もちろん天候は全てを左右する。そのため、計画は周到な高度順応スケジュールと十分な予備日（五日）を含めたものとした。食料は、高所用に尾西のアルファー米を三食、BCでのラーメン二食を日本から持って行った以外は全て現地で調達した。基本的に、朝食はパン（BCのみ）、シリアル（グラノーラ、ミューズリなど。お湯を沸かして粉ミルクを溶くだけで自分の食欲に応じた分量だけ食べられる。但し、甘いのは飽きる）、晩はスープ（クノール）にパスタ類と野菜を入れたものであった。昼食・行動食はビスケット類、チーズ、ドライ・フルーツ&ナッツの類である。ラーメンは沸点が低いので伸びたが、味覚のアクセントとして楽しんだ。アルファー米は優れものであった。食料買い出しに必要な詳細な献立は遠藤さんが、さらにキャンプでの料理もほとんど遠藤さんがやってくれたので、とても助かった。薬品は二〇一〇年に斎藤Yさんにそろえてもらったのを持って行ったが、幸いにもダイアモックスを含めて登山中は一切使用しなかった。

## 行動概要

具体的な行動は以下の通りである。地点の高度は地図や看板によってまちまちで、どれが正しいか判らない。頂上の標高以外はあくまで目安である（地図を参照）。

一月四日：成田発。
五日：ダラス・フォートワース（USA）経由―サンティアゴ（チリ）経由―メンドーサ（アルゼンチン）

メンドーサの空港を出ると思いがけず、アルゼンチン雪氷研究所の若手研究者（緊急時の現地連絡先としてスケジュールを渡していた）が空港までトラックで迎えに来てくれていた。彼の情報で米ドルとアルゼンチン・ペソの公式為替（約四・九六ペソ／US$）と町の為替屋の為替（六・六～六・八ペソ／US$）に大きな差があることを知る。いわゆる闇であるが、町中の目抜き通りで何人も立っ

ており、堂々とやっている。この情報で大分得した。

六日：メンドーサ滞在（ラバ輸送の手配、登山申請、食料買い出し）

ラバ輸送の手配にインカ社へ朝一で行く。これについては九月ごろからいろいろとやりとりをし、四日の出発直前にも六日の朝に行くと連絡した。ところが、行って名前を言ったら「アンタ誰？」という顔をされた。当日事務所にいたのはやりとりした女性とは別の担当者で、引き継ぎが全くされておらずなにも聞いていないと言う。驚きである。幸い我々が希望した日は空いていた。また、私がやりとりしていた担当者は登山申請をしてから来いと言っていたが、これは逆で、登山申請の前にここに来て書類を作成するのが手順であった。エイジェントに書類を作成してもらわないで申請に行ったら、登山料が二〇％増しになるとのことであった。前回の経験があったので、ここに最初に来たが、例によって全くいい加減である。パゴ・ファシル（Pago Facil）で登山料四二〇〇ペソ（実勢で約US$六二〇）を払い、その領収書をもってツーリスト・オフィスに申請に行く。午後、食料買い出し。以前は中央市場で買い物をしたが、今は町の中心を外れたところに大型のカルフール、そして町中に小さなカルフールが出来てとても便利になっている。

七日：メンドーサ滞在（食料買い出し、バスの切符購入）

午前中、食料の買い出し。午後に翌日のバスの切符を買いに行くが、システムがダウンして販売できない、と言われた。幸い間もなく回復して購入できた。夕方、食料の整理・パッキング。夜、アルゼンチン雪氷研究所の研究仲間が我々の歓迎アサード（焼き肉）パーティを開いてくれた。研究所内に立派なアサード用の施設があり、サラダなど手作り料理も振る舞ってくれた。一人四〇〇～五〇〇gぐらいいろいろな部位の肉を豪快に食う。味付けは塩・胡椒だけで、ソースの類は一切使わない。

八日：メンドーサ―ペニテンテス―コンフルエンシア

朝四時起床、タクシーでバス停へ。荷物が多いので渋るがなんとか説得した。六時過ぎバス出発。バスを待っている間に、同じインカ社のラバ輸送を使い一人で登る日本人、同じくペルー人（ネヴァド・ワスカランの麓に住んでいて、国際山岳ガイドの資格をもっているそうだ。高度順応の必要がないので六～七日で往復する予定とのことだった）と話をする。九時にインカ社の基地があるペニテンテス（Penitentes）に到着。ラバ輸送（一頭六〇kgまで、US$一八〇）のために荷物の重量を量る。我々は八四kgでオーバーであった。二四kgを一人で行く日本人のラバに乗せてもらう。この後、オルコーネスの州立公園（アコンカグアは西半球、南半球での最高峰であるが、国立公園ではない。世界遺産でもない）のレインジャー事務所に行き、入山の手続きをする。この際、ゴミ袋を一人一枚もらう。下山の時にこれを提出しないと罰金（一〇〇〇ドル）がかけられる。ここから標高三四〇〇mのコンフルエンシア（Confulencia―出合）まで昼食を含めて三時間半程度かけて登る。名前の通り、オルコーネス・インフェリオール（Horcones Inferior）とオルコーネス・スーペリオール（Horcones Superior）の合流点にあるキャンプ地である。レインジャー・ステーションで入山のチェックを受ける。我々の予定を聞き、翌日の夕方メディカル・チェックに来るよう言われた。ここにはドクターが常駐していて、$SpO_2$（血中酸素濃度）と血圧、そして肺の検査を受ける。因みに、$SpO_2$が八五以下、血圧が一五〇以上だと強制的に降ろされる。

九日：快晴。コンフルエンシア―プラーサ・フランシア―コンフルエンシア

オルコーネス・インフェリオールにあるプラーサ・フランシア（Plaza Francia、四二〇〇m）へ高度順化歩行。前二回はここには来なかったので初めてである。はっきりとしたトレイルが氷河左岸のラテラル・モレインについている。ここは南壁の登攀基地で、名前の通りフランスが一九五四年に初登攀したときに使った。氷河はデブリに覆われていて氷はほとんど見えない。豪快な景色である（写真1）。メスナーは単独で五日で登った。二〇〇二年には単独で二二時間で登った記録がある。

キャンプに戻りしばらくしてから、メディ

カル・チェックに行く。ここにいた女医に見覚えがあった。二年前手指の凍傷で降るとき、写真を撮った医者だ。診察の後、そのことを言ったら彼女も私のことを覚えているという。なんとなく嬉しかった。

一〇日：快晴、午後雲が出る。コンフルエンシアー―プラーサ・デ・ムーラス

オルコーネス・スーペリオールの谷を、一般ルートのベースキャンプであるプラーサ・デ・ムーラス（Plaza de Mulas、ラバの広場、～四三〇〇m）まで一八km弱を約九時間の歩行。ここは、業者のバンクベッドがあるテント、シャワーテント、食堂テント、インターネットテントなどが、所狭しに張られている大きなテント村である。インカ社の領域に我々のBC用のテントを張り（ダンロップV4）、ラバで運んだ荷物を受け取る。インカ社のチーフのベレンは二〇一〇年にもいて顔見知りだ。テント村は、表面は砂利であるが中には氷河氷が入っているモレインの上にある（写真2）。レインジャーは許可証をチェックした後、トイレット・バッグを渡しながら、次の日の夕方メディカル・チェックに来るように言う。ここから上の固形の排泄物は持ち帰らなければならない（五〇〇ドルの罰金）。薄いのでバッグを二枚もらう。実際に使ってみて分かったが、一回、一回小さな袋に用を足してこの大きな袋へ入れれば、破損等による漏れは心配ない。実際にはすぐに凍って漏れる心配はないが。日本の携帯用トイレを持って行けば全く心配ないだろう。

幸いにも頭痛、下痢といった高度障害はない。我々の三時間ぐらい後に到着した単独の日本人の若者（我々の荷物の一部を運んでもらった）は、着いた早々テントを張る間もなく、顔色が悪いからすぐ医者に診てもらえと言われ、行った。間もなくしてしょんぼりと帰ってきた。肺に水が貯まっていると言われ、即刻ヘリコプターで下山を命じられた、と言う。明日だったら大丈夫だっただろうと言いながら、無念そうにヘリコプターに乗り込んだ。

一一日：快晴、午後雲り。プラーサ・デ・ムーラス―プラーサ・カナダ

プラーサ・カナダ（Plaza Canada、～五〇〇〇m）へ高度順応を兼ねた荷揚げ。高所用テント（ダンロップV3冬張り）を設営する。荷揚げのポーター達はものすごい早さで登って行く。前回よりかなり増えている。時期的なものだろうか。あるいはより多くの人たちがポーターサービスを利用するようになったのだろうか。これに加えて、金さえ出せば、ムーラスではバンクベッドに寝て、ワイン・ビール付きのローストビーフやチキンを食べることができる。テントも料理道具・材料もいらない。貸しテントもある。しかし、我々はムーラスより上では自分たちで全てをやることに拘った。

夕方、メディカル・チェックを受けてOKをもらう。診察に加えて、高度順応計画、登

写真1．アコンカグア南壁（2013年1月9日）。高度差約2700mの壁を見上げる。右がピーク。左は南峰（6930m）。

写真2．プラーサ・デ・ムーラス（2013年1月10日）。岩・石・砂利の下は氷河氷だ。右の建物はレインジャー小屋と診察所。柵はヘリパッドのもの。会社によってテントの色が異なる。

頂予定日なども細かく聞かれた。昨日の日本人のケースを目の当たりにしているので、やはり一安心である。

一二日：快晴、午後曇り。プラーサ・デ・ムーラス停滞

休養日。一日中ぶらぶらする。二人とも顔に少々むくみが見られるが、気分は爽快。夕方メンドーサのバス停で一緒だった単独のペルー人と遭う。彼は今朝七時にニード・デ・コンドレス（Nido de Cóndores、コンドルの巣、～五五〇〇m）を出て、頂上に一二時につき、テントを撤収してムーラスまで下山してきた、と言う。一二時間足らずで、約一五〇〇m登り、二六〇〇m降りたわけだ。この日の頂上は暖かったと言って、半袖のTシャツ一枚で撮った写真を見せてくれた。話しながらビールをうまそうに飲んでいた。

一三日：一部曇り、午後雪。プラーサ・デ・ムーラス―プラーサ・カナダ―ニード・デ・コンドレス―プラーサ・カナダ

高度順応登行の開始。プラーサ・カナダを経由してニード・デ・コンドレスまで登る。ここにデポした後、カナダまで戻り、滞在。

一四日：快晴、午後雪。プラーサ・カナダ―ニード・デ・コンドレス―五七〇〇m付近でデポ―ニード・デ・コンドレス

プラーサ・カナダをたたみ、テントを担いでニード・デ・コンドレスまで登り、テントを設営。その後、食料・衣料などをプラーサ・コーレラ（怒りの広場、～六〇〇〇m）への途中まで担ぎ上げ、デポ。天気が悪くなり、二時過ぎに雪が降り始める。しかし、ニードは暖かく無風である。二年前低温と烈風で、ここで両手指に凍傷を負ったとはとうてい信じられない天気である。後日、隣に夏用テントが張ってあり、我々の吹き流しの冬天と対照的であった。

一五日：一部曇り。ニード・デ・コンドレス―プラーサ・コーレラ―プラーサ・デ・ムーラス

朝日が当たる前に出発したらすぐに遠藤さんが、右足の親指の感覚がない、と言う。テントに戻り、ぬるま湯に浸ける。日があたってから出直し、昨日デポしたものを中心にプラーサ・コーレラまで上げてデポする。コーレラの直下は急な岩場となっており、頼りないフィックス・ロープが何カ所か張ってある。しばらく滞在した後、BCまで休養のため降る。テントはニードに張りっぱなしである。

一六日：快晴。プラーサ・デ・ムーラス停滞

休養日。インターネットでアコンカグアのこれからの一週間の天気予報をチェックする。今までの経験では、この予報はかなり的中している。これによると、二〇日ぐらいまでは午前中晴れ、午後から小雪とのこと。風はそれほど強くない。アタックは可能だ。その後はまとまった雪が降るようだ。

一七日：快晴、午後一部曇り。プラーサ・デ・ムーラス―ニード・デ・コンドレス

アタック開始。BCからニードまで上がる。前回よりはペースが上がっている。アタック日和で、上部のルートがはっきり見える（写真3）。

一八日：快晴、寒い。ニード・デ・コンドレス―プラーサ・コーレラ

ニードからテントをコーレラまで上げる。無風快晴の気持ちのよい天気であったが気温は低かった。上の斜面は雪で真っ白だ。高度順応がうまくいっているようで、六〇〇〇mのここでも全く問題ない。

一九日：快晴、午後雪。プラーサ・コーレラ―頂上―プラーサ・コーレラ

写真3. ニード・デ・コンドレスより上部を見上げる。一般ルートは左のスカイラインの裏側を通り、やや右上のピラミッドの下の雪の斜面をトラバースして、その裏を斜め左に登る。

起床四：三〇分、出発六：〇五分である。ガイド付きのパーティの多くは四時半頃から五時までに出発したようだ。アイゼンを履いて出発。思ったほど寒くはない。気温はマイナス一〇度程度か。風がないのがありがたい。先行トレースを黙々とたどるが、出発してまもなく遠藤さんが右足の親指・小指の感覚がないという。私の二年前の経験があるので、靴用カイロを二枚にして対応。インディペンデンシア避難小屋（Refugio Independencia、～六四〇〇m）のすぐ上、ポルテスエロ・デル・ヴィエント（Portesuelo del Vient、風の通り道）で行動食を食べたいという遠藤さんと分かれる。ここからラ・クエバ（La Cueva、洞穴～六六〇〇m）まで延々と長いトラバースが続き、先行者を次々と追い越していく。ここでかなりの人達がアイゼンの使い方を知らないで登っているのに少々驚いた。多くの人たちがトレッキングに毛の生えた程度で登れると思っているからだろうか。ラ・クエバから上の斜面、カナレータ（Canaleta、ガレ場）は傾斜がきつく、高度と相まってきつかった。普段はガラガラの石の斜面（カナレータの名前の由来）だが、雪が適当に締まりアイゼンが効くので登りやすかった。

私が頂上に立ったとき（一二時一一分）、アルゼンチン軍（あるいは国境警備隊）の若者数人を含めて、一〇人ちょっといた。頂上の象徴である十字架と共に写真を撮るのに皆忙しい。私の髭が真っ白なので部隊の隊長が興味を示し、部下に年齢を聞きに来させたのが面白かった。さすがに疲れたが、気分は爽快であった。不注意にも私のディジカメのバッテリーがニードでなくなったので頂上用に遠藤さんのカメラを借りて持ってきた。頼んで写真を撮ってもらった後、しばし休む。一二時前から雲が出てきて南壁はまったく見えず、その内東側も雲となった。頂上で一時間ぐらい休んだので下ろうとして下を見たら、遠藤さんが頂上まですぐの所にいるのが見えた。二人一緒の写真を撮るべく待つことにした。どうせ後は下りだけだ。彼は一三：二五分頃ついた。握手を交わし、二人一緒の写真を撮る（写真4）。私は一三：三五分頃下山を始めたが、まもなく雪が降り出した。天気予報は当たっている。時には強く、時には止んだりしながら夜まで続いた。インディペンデンシア避難小屋から下の雪の斜面は時折ホワイトアウトになったが、幸いにも気温は低くなく風も弱かった。私はコーレラのテントに一五：五〇分頃、遠藤さんは一六：四五頃帰着。改めてお互いの成功を祝った。

二〇日：晴、午後雪。プラーサ・コーレラ―プラーサ・デ・ムーラス

下山の途中ニードで日本から来た登山ツアー・グループ（ガイドを入れて六人）と単独者に遭う。我々がデポを回収していたら、ツアー・メンバーの一人で法政大学山岳部OBという人が話しかけてきた。荷物は個人装備を含めて全てポーターが運び、自分たちはサブザックに雨具・防寒具・スナックのみで登ってきたので拍子抜けした、と言っていた。午後から天気が悪くなり雪が舞う。次の二～三日は悪天の予報だ。BCでこのときのために持ってきたワインで祝杯を挙げる。

二一日：雪。プラーサ・デ・ムーラス停滞

終日雪が降り、視界は五〇～一〇〇m、プラーサ・デ・ムーラスも数センチ積り真っ白になった。予備日五日は全部余っているので、余裕であった。私たちは天気に恵まれたことを改めて感じ、幸運に感謝した。

二二日：晴、午後雨、寒い。プラーサ・デ・ムーラス―ペニテンテス

メンドーサへ戻る予定の朝、トイレで並んでいたらアメリカ人から二一日の明け方四時

写真4. アコンカグアの頂上（2013年1月19日13時26分）。右が遠藤、左が安仁屋。頂上のシンボルだった十字架は盗まれて、今は簡単なもので代用。見て分かるとおり、風もなく寒くない。

頃、プラーサ・コーレラで肺水腫を罹った女性の救出劇があったことを知らされた。因みに後日、メンドーサで我々より二日遅れて行動していたスイス人に会ったが、二一日は積雪が膝より上で視界が全く効かなかったので、全員インディペンデンシア避難小屋で引き返したとの話を聞いた。そしてこの天候の日前後に何人か犠牲者が出たとの話を聞いた。

この日の朝は私たちが経験したムーラスでは一番寒く、羽毛服、手袋なしではなにもできなかった。BCのテントを撤収し、下山の荷物をゴミと共にインカ社に預け、九時半レインジャーに下山出発のサインをもらい下り始めた。周りの山々は白く、岩だけとは全く違う見事な姿態を見せている。幅広い谷を淡々と歩き、コンフルエンシアには一四：二〇頃到着。西の方で雷がなり、にわか雨が降っているようだ。車の迎えを一七：三〇にするよう頼んで出発。まもなく冷たい雨が降り出して来た。寒い！車の送迎場所には約束の一七：三〇になってもインカ社の車は来ない。二年前も来なかった。今回もやはりそうか、というあきらめと、冷たい雨の中で待っているので、彼らとの時間の約束は全く当てにならないと分かっていても、しゃくにさわる気分である。結局一八時頃、他社の車でレインジャー事務所に行き、下山手続きを済ませた。ペニテンテスには一八：三〇頃帰着。我々の荷物はまだ届いていない。二〇時頃ようやく届いた。メンドーサへ行くバスは二〇時頃発だ。停留所へ送ってくれたインカ社の担当者がバスは来ないかもしれない、道路が今日の雨で流されて不通になっているらしい、と言う。来るか来ないか分からないバスを待っている間、同じく待っていた二人のアルゼンチン人と親しくなり、結局彼らの紹介で安い宿に泊まることができた。二週間振りのシャワーを浴びた後、夕食は併設の食堂でワインを飲みながら三〇〇gのステーキを食べた。旨かった。

二三日：快晴、午後から風。ペニテンテス―メンドーサ

ぐっすりと寝て八時過ぎに起きた。一二時頃のバスでメンドーサに戻る予定にしていたら、一一時過ぎにこのバスはないことが判明した。道路がまだ開いていないという。親切なアルゼンチン人二人はいろいろと交通手段を捜してくれたが、結局なかった。一七時のバスは来るだろう、と言う。これを待つしかない。食堂で昼飯を食べていたら、下りのバスが来た。このバスが折り返して一七時頃のバスとなるので、一安心であった。その夜、八時過ぎにメンドーサのホテルにチェックインした時はさすがにほっとした。

二四日～二八日：メンドーサ滞在

予備日の消化。レンタカーで観光地を回ることも考えたが、多くの景勝観光地は真夏で暑すぎるので閉鎖している。それでメンドーサでのんびりすることにした。この間、ありがたいことに、アルゼンチン雪氷研究所の若い研究者二人がそれぞれの家族のアサードに招待してくれ、アルゼンチンのアサードを満喫した。

二九日発、三一日帰国。

## 第二四回雲南懇話会（二〇一三年三月三〇日開催）の講演概要とコメント

安仁屋政武、前田栄三

二〇一三年三月、第二四回雲南懇話会（代表：安仁屋政武）が東京市ヶ谷のJICA研究所（国際会議場）で開催され、一〇一名の参加を得て盛会であった。以下、講演の概要とコメントを紹介します。

### 一、「ヒマラヤの自然の聖地、その一」―ブータン東部の女神伝説―　写真家、AACK小林尚礼

ブータン東部のタシガン県に伝わる女神伝説、アマ・ジョモについて紹介し、年一回七月に行われる女神に関連する聖地での特別の祭りについて写真を中心に紹介した。また、普通入ることの出来ない寺院に、観光プロモーション用の壁画・像の写真を撮る為、特別入ることを許可された。これらの珍しい、貴重な写真を一部、紹介した。

**二、「高校生に夢を！夢舞台／崑崙の未踏峰へ」**―ヤズィックアグル峰（六七七〇m）初登頂の記録、二〇一一年―　信濃高等学校教職員山岳会（信高山岳会）　大西　浩

信高山岳会創立三〇周年及び長野県山岳協会五〇周年にあたる二〇一一年、会の原点に立って、教師自身が夢を育み、夢に挑み、得たものを、今後の高校登山の活動に反映させ、更に多くの子どもたちに夢を伝えたいという思いから、西部崑崙山脈の未踏峰（六七七〇m）に挑戦し、登頂に成功した記録である。

この山は、安仁屋らにとって少なからぬ因縁がある。二〇〇七年崑崙隊（隊長、安仁屋）の芝田正樹隊員が視認し偵察した山、それが「この山」である（ヒマラヤ学誌第九号、一八四頁）。

安仁屋らは二〇〇九年七月に会員五人でこの山を登りに行く計画を立て入念な準備をしていたが、出発直前に発生したウルムチ騒動により、渡航を断念せざるを得なかったからである。しかし、演者等は偵察行とはいえ〇九年に同じ経験をしながらも、翌一〇年の偵察行（大雨による道路事情の悪化により、失敗）など執拗に登頂を目指し、二〇一一年に成功した。長野県の登山関係者と新疆地域のエージェントとの長年にわたる交流・信頼に根付く執念の違いであろうか。準備期間その他の関係で、高校生を連れて行くことは出来なかったが、長野県出身の若手ＯＢの参加を得て成功した話は、次のステップに繋がるであろう。

**三、「ベトナム北部の茶と米食文化」**―首都ハノイを中心として―　京都大学Global COE研究員　長坂康代

雲南懇話会で最近力を入れている「お茶」に関する話題である。ベトナムでは、世界を席巻しているコーラが普及していない。その理由はお茶である。タイグエン茶（緑茶）が一般的で、飲む場所として「内」の茶屋と「外」の茶屋がある。外の茶屋にはさらに固定茶屋と移動茶屋がある。演者は固定茶屋に焦点を当てて機能や客層など詳しく説明した。単なるお茶の提供に止まらず、コミュニティの形成にとって重要な役割を果たしていることを、客の細かい観察・分析から明らかにしている。近年ハノイでもコーヒーが浸透し始めているが、お茶の八～一〇倍するので一種のステータスシンボルとなっている。コーヒーを飲む場所、値段で客層を四つのグループに分け、コーヒーと同時に食する米食を分析した。茶文化の懐の広さ・深さを改めて認識した。

**四、「北の紙の道、南の紙の道」**―樹皮紙、ダード・ハンターの残した空白―　文書修復家、（元）吉備国際大学教授　坂本　勇

北のシルクロード沿いに、ヘディンらにより発見された文書や残紙を用いた調査研究は、素材が多く広く知られてきた。近年、東南アジア・太平洋地域においてオーストロネシア語族の調査研究が、考古学・人類学・民族学・言語学等の諸分野で発展し、樹皮紙／樹皮布についての情報が増えている。

演者は紙の専門家として、中国、インドネシア、メキシコ等で発見されている神秘的な「透かし模様」の石器ビータに注目している…という。

ＪＩＣＡエキスパートとしてインドネシア・バンダアチェで津波の被害を受けた文書の修復事業に三年間携わった時に行なった調査で、ダード・ハンターの「世界の紙の伝播マップ」で東南アジア地域が空白になっていることが、調査・研究をスタートした切欠である。紙の製法として古くは樹皮をたたく方法があり、樹皮紙は世界に広く分布していた。インドネシアでは樹皮紙の技術が高度に発達していて、その歴史は布と紙の混在時期を含める三六〇〇年前ぐらいまで遡る。会場では樹皮紙で作った四〇〇年ぐらい前の本を見せてもらい、触らせてもらったが、実に素晴らしい物であった。薄い物は厚さ〇・〇五㎜だそうである。

**五、「中国少数民族の自治と慣習法」**―悠久、雄大、多様の大地へ―　山梨学院大学教授、一橋大学名誉教授　西村幸次郎

悠久、雄大の大地は、人口、人権・自由、環境、民族などの多様の問題を抱え、日中関係もきわめて厳しい状況が続いている。演者は、これまでの少数民族地域における視察・交流を踏まえ、民族法研究の意義を確認し、民族区域自治制度、中華民族の多元一体論、西部大開発との関係、民族の風俗習慣、民族慣習法と国家法、婚姻法の「弾力的補足的」規定の順に検討し、中国社会における民族問

題の重要性、問題性を考える…として講演された。

演者が中国の民族法に興味を持ったのは一九八八年の海南島旅行からで、その後、何遍も現地を訪れて二〇余の少数民族と交流し調査を行ってきた。従って、内容は盛りだくさんで多岐にわたった。参加者のある人曰く、「一年間の講義を一時間でやったようなものですね」。同感。時間の関係でそれぞれのトピックについて説明が短くならざるを得なかったが、個人的に特に興味を持ったのは、共産党になって以降の民族の風俗習慣の扱い方の変化である。尊重（一九四九～一九五六）、軽視（一九五七～一九六五）、排斥（一九六六～一九七六）、改革期（一九七七年以降）とあり、それぞれの背景（文化大革命など?）、要因を詳しく聞きたかった。最後にNHKの名曲アルバムから「草原情歌」を青海省の映像と共に流したが、氏の少数民族に対する思いが伝わった。

## AACKニュース

**○会員　山本紀夫氏に「今西錦司賞」**

本誌六三号で紹介した『梅棹忠夫』の著作によって、著者山本紀夫氏が日本山岳会京都・滋賀支部より「今西錦司賞」を授与された。京都に生まれた探検者、学者である梅棹忠夫の思想と生涯を、長年にわたり師事した弟子にして初めて成った優れた評論を高く評価されての受賞である。

**○登山医学会の市民講座で斉藤、松林会員が講演**

去る六月一六日京大の稲盛記念ホールにて、日本登山医学会主催の市民講座で、斎藤惇生、松林公蔵会員が講演を行った。斎藤氏は「ヒマラヤ登山と高所住民との交流：歴史的考察」、松林氏は「高所順化（Acclimatization）と高所適応（Adaptation）」と題して、参加した約一〇〇名の参加者にわかりやすく講演、なかなかの好評であった。

## 会員動向

## 編集後記

○四〇年の歳月とはいえ、ヤルン・カン遠征隊員の半分以上が物故されたとは一寸寂しい限りです。それだけにこの特集号では出来るだけ多くの現存隊員にご執筆を依頼しました。そのため原稿が揃うのに時間がかかってしまい、春、夏の合併号となりました。早くに原稿をいただいた筆者には誠に申し訳なくここにお詫び申し上げます。

○小生本誌四三号から五年余編集を担当させていただきましたが、次号より若い（?）横山宏太郎氏にバトンタッチすることになりました。氏は一九七二年入会。ご存知の通り、チョモランマ、ブータンのマサコン初登頂、二度にわたる南極越冬、そして第一次梅里雪山と輝かしい活動をされた雪氷学者。このニュースレターがますます活気づく事を願っ


発行日　二〇一三年七月末日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松林公蔵
発行所　〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
竹田晋也　気付
編集人　前田　司
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
㈱土倉事務所